

---

# 新レーゲスタ創世譚 第四章 『行きしもの 過ぎし刻』

樽みのり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新レーゲスタ創世譚 第四章 『往きしもの 過ぎし刻』

### 【Nコード】

N53840

### 【作者名】

樗 みのり

### 【あらすじ】

キソスの地下に潜む ウルド （闇森の主）を求め、ラストーは一人地下を動き、ナハにより地上の宿へ連れもどされたカラは、病身のアルフィナを残し、離れ離れになった仲間を求め、再び地下を目指します。そこで、思いがけず ウルド と再会しますが。

キソス編最終章となります。（話はまだまだ続きます……）  
流血場面が増えますが、苦手な方はご注意ください。

## 序章（前書き）

第二章から続く「キソス編」が、ようやくこの章で終わります。  
毎回おなじみ（？）序章は、鬱陶しい謎の文面で始まります。

## 序章

> i 1 3 2 4 6 | 2 4 0 <

### 序

エランは、大地にある様々なものから、種々の器を創り出されると、それに三度、息を吹き入れられた。

ひとつの息は、ひとつの魂となり、故に、三度入れられたエランの息により、器には三つの魂さんこんが宿ることとなった。そして、この三魂が揃うことにより、器は始めて、新しき生命として目覚めたのである。

然る後、エランは新たな生命に《名》を与えられ、《名》を与えられた新しき生命は、《影》を伴い、光ある世界へと旅立った。

3

三魂は、其々役割を異にしている。

第一の魂は 過去

第二の魂は 現在

そして

第三の魂は 未来 を担う。

器である肉体が、光ある世界に生きるものとして存在する間、現在の魂が器の主ぬしとなり、器の意思となる。

過去の魂は、現在の後見であり、未来は嬰兒のごと

く、傍らでただまどろんでいる。

歳月が流れ、死が訪れた時、器は源である地へと還る。

過去の魂は、今生の役割を終えた器に留まり、共に朽ち消えゆくを待つ。

現在 は、未だまどろむ 未来 を誘い、朽ちゆく 器 より離れ、新たな 器 を得る日まで、光と闇の狭間を彷徨する。

幾千の昼と夜を超え、新たな 器 に辿り着いた時、ふたつの魂は、新たな 魂 へと変ずる。

現在の魂 は、見護るものである 過去 となり、まどろみ続けた 未来の魂 に、真の目覚めを促す。

目覚めた 未来の魂 は、真新しき 器 の主である 現在 となる。

これらふたつの新たな 魂 が、 器 で各々の役割を定めし後、新しき 未来の魂 が、 器 の内にて生じる。

こうして新しき 器 は、 三魂 の揃いし、確かなひとつの存在と成るのである。

光ある世界 にある生命は、僅かな変化を繰り返しながら、エランより与えれし聖なる 魂 を、とこしえに継いでいくのである。

器 は、死により終焉を迎えるが

魂 は、死を超える、永久の存在である。

《 聖典 「魂の章」より 》

\*

この 聖典 一節に記されているのは、「魂の永遠」「転生」に纏わる言葉である。

死により今生の 器 身体は失われても、何れの日にか 魂は新たな 器 を得、 光ある世界 に再び戻ることが出来るのだと、信じる者は少なくない。

聖神シン・エルナイ聖教 に代表される、熱心なエラン信者の中には、 三魂 を与えられ、新たな 器 を繰り返し得ることが出来るのは、 光ある世界 の住人でも、人間だけであると主張する者達もある。

だが、いずれで語られているものも、 光ある世界 の住人についてのみである。

闇に棲むとされる存在。

《名》と《影》を、エランより与えられなかったとされる 闇に棲むものは、どうなのか。

民間の伝承では、それら 闇に棲むものは、神であるエランから ひとつの魂 三魂 という 過去の魂 しか与えられず、それ故に、ひとたび 死 を迎えれば、 器 と共に 魂 は朽ち、再び生を得ることはないのだという。

ひとつだけの、一度きりの生しか与えられなかった 闇に棲むもの達は、引き換えに、 三魂 を持つ存在からは計り知れぬ長久の時を、を生きることが出来ると云われている。

何れの伝えとて、真偽は定かではない。

だが

これらの伝えが事実であったとする。

そのうえで思う。

死と生を繰り返す、光ある世界の住人と、一度きりではあるが、果てなく長い生を得た、闇に棲むもの達。

この二者の生を選択できた時、人は、何れの生を選ぶであろう。

そして……。

## 第1話：縁

### 1：縁

かねめ  
金目の物を頂いたら、大抵、さつさとその場を離れるのが常だつた。

神官達の居住棟には、大した物は置かれていないが、神を祀る祭殿には、庶民には縁もないような、数え切れぬ金銀が眠っている。

日々の糧の多くを、盗みにより得る者にとって、神殿は宝の山のようにだ。

だが、流浪の生活を強いられている貧者であっても、少なからぬ者が神を畏れ、罪を得ることを怖れていた。それ故に、神殿に近付くことを倦厭する者も多かったが、私にとって、それは無意味な存在だった。

むしろ、十四の私は、それらを憎み、蔑んでいた。

祭殿は、嚴重に護られているようで、いったん中へ入りこめば、広い空間を易々と動くことが出来た。

身長は伸びていたが、その頃の身体は肉付きのない、まだ柔軟な子供のものであったので、万が一何者かと行きあわせても、狭い通路や隙間に逃れることも、隠れ潜むことも容易だった。

この祭殿は、下っ端の衛士はいても、騎士を雇ってはいない。

間抜けな神官共は、私が幾度盗みに入り、奴等にとっての神聖な品々をいくら持ち出そうとも、一向に気付く様子はなかった。無論、こちらも一度で気付かれるようなへマはしない。

危険も伴うが、幾度かに分け持ち出したほうが、より多くの品を持ち出せた。

一度に扱う品は、少ない方が管理もし易く捌き易かった。

第一の目的は金だ。しかし、それ以上に、取り澄ました神官共の知らぬ間に奴らの宝を奪い、それに気付かぬ奴等の間抜けさを嘲笑う愉快が、私の足を神殿へ向かわせた。

あれは、五度目に忍び込んだ夜だった。

進入経路は三通りあったが、その夜はいつもと違う道を探そうと試みた。神殿の奴等がいつか気付いた時、こんなにも自分達が間抜けだった、ということをし、報せてやりたい気持ちがあった。

最も神聖である祭殿に、神官共が陰で「鼠」と呼ぶ盗人が、幾本もの抜け道をつくり、多くの宝を盗み出したと知った時、奴等はどんな表情を見せるだろう？ 多くの宝が失われていると知った後、鈍い頭を寄せ集め、元より蒼白な顔を、更に蒼ざめさせるのだろうか、私は盗みを重ねる度、ひとり笑った。

しかし、全ては未熟な子供の驕りだった。

神殿の奴等は、既に祭殿から多くの品々が消えていることを知り、密かに警備を厚くしていた。衛士の数を増やすだけではなく、腕が立つばかりの無頼の剣士ではなく、罪人への制裁権を持つ正騎士を雇い、盗みに入った輩を、確実に処する体制を整えていた。

私は騎士の剣に腕を斬られ、追い込まれた。

走り逃げる私を、騎士はゆったりとした歩みで、確実に追ってきた。

足には自信があった。振り返り見た時に、騎士との距離はかなり離れたことを知っていた。にも関わらず、大柄な黒衣の騎士は、すぐにも私の背後に現れ、鋭く研ぎ澄ました剣で、心臓に一突き、

止めを刺すのではないかという恐怖が、私の鼓動を速めた。

遠くに、衛士達が叫び走り回る足音が聞こえる。その先に、あの騎士の、不気味なほどにゆったりとした靴音が、聞こえるような気がした。

斬られた腕からはとめどなく血が流れていた。その傷を縛るためにも、いったん足を止め、身を隠せる場所が必要だった。

私は光のない闇の中を、壁に手を沿わせながら、慎重に、だが必死に進んだ。

どこをどのように歩いたのか。無我夢中で進むうちに、私は祭殿のある棟とは違う、別棟の廻廊に迷い込んだようだった。

普段は使用されていない地下廻廊なのか、空気は淀み、酷くかびた臭いに満ちていた。

照明の備えは、燭台どころか、明り取りの窓すらない。

僅かな漏光もない通路は、上下左右も分からなくなるほどの、静寂と闇に飲み込まれていた。

闇のあまりの濃さに、私の歩みは自然遅くなった。

呼吸一つすることも躊躇ためらわれるような、重い空間。そこにいるだけで、酷い疲れを感じた。

「こちらです」

突然、私の手首を掴む者があった。

反射的に私はその手を払い身を退いたが、相手はこの闇に慣れているのか、すぐに私の手を掴みなおし、私を行かせまいと引っ張った。

「お願いします。信じて ついて来て下さい」

私を掴む手は、微光もない闇に白く浮かんで見えた。

私が抵抗しないことを知ると、手の主は、私の手を改めて握り、

闇に沈む通路を、迷いのない足取りで進んだ。

案内人は黒い布で全身を覆い隠しているらしく、私の手を握る手先以外、姿を知ることには出来ない。

幾重にも折れる、迷路のような通路をどれ程か進んだ頃、案内人が足を止め、正面の壁を探り始めた。小さな白い手の探る上方に周囲の闇と僅かに色が違う黒が見えた気がした。

手を伸ばすと、額のような棒状の物に手が触れた。恐らくは、大型の絵が飾つてあるに違いなかった。

案内人が、額の下部をしきりに触っているので私も触れてみると、それまでとはやや感触の違う壁があることに気付いた。軽く叩くと、そこは隠し扉らしく、奥に空間があることが分かった。

案内人は、壁の上下部分を一回ずつ押し、その後中央を三カ所、静かに押した。

音もなく、扉は開いた。

案内人は、手の動きで先に室内へ入るよう促した。

一瞬の躊躇ちゆうちゆうの後、私は足を入れた。

瞬間、室内の光に目が眩む。

大した照明が有るわけではなかった。だが、長い間闇の中にあつたため、強くもないその光が、私の眼には眩しかった。

私に続き室内に入った案内人は、扉を閉め、再び何かしらの仕掛けを施したようだった。

やはり、全身を墨色の外套で覆っていた。

目深に被ったフードのため、顔は未だ見えなかったが、通路で発した声と華奢な白い手から、それが女だということは明白だった。

二本の蝋燭の、仄かな黄色い灯りが壁面の燭台で揺らめいていた。広い室内の床には、草木の図柄を織り込んだ、毛足の長い暖かな赤色の絨毯が敷かれ、壁面にも、象牙色の毛織のタペストリーが、壁面を埋めるように掛けられていたが、装飾的な調度は一切なかつ

た。

暖かな光の揺らめく室の右奥には、紗の衝立を隔て、小さな寢所が設えてあり、衝立より少し手前には、小卓と二脚の椅子が置かれていた。

案内人は、静かに寢台の傍らへ歩んだ。

私は扉に近い場所に立つたまま、案内人の動きを見ていた。

どちらも何も言わず、静寂が空間を支配していた。ただ時折、灯の揺らめきが周囲の影を僅かに動かした。

案内人は、寢台横の棚から小さな箱と水盤を手に取ると小卓の傍へ行き、それらをそつと置いた。

「その装束が、あんたの制服か？」

案内人が顔を上げ、私に声をかけようとした瞬間、こちらから言葉を投げつけた。

私の声の不信は、黒い鎧のような外套を着ているためと思ったのか、案内人はゆっくりとフードを下ろし、黒装束を脱いだ。

「このような姿のまま、失礼をいたしました。闇の中では、私の姿は目立つものですから……」

墨色の外套の下から現れたものは、全てが銀細工のように白く輝いていた。

肌も、その身を覆う長衣も髪も、全てが淡い光を帯びた銀白色。

唯一瞳だけが、淡く儂げな緑をしていた。

脱いだ装束を女は丁寧に畳むと、手近な椅子の背に掛け、改めて私に視線を戻し、微笑んだ。女が僅かに動く度、腰よりも長く伸びた髪がしなやかに流れ動いた。

女には、見覚えがあった。

以前盗みに入った時、祭壇で祈りを捧げていた。

白銀の長い髪が印象的だった。

女が祈りを捧げている神の像に、とても似ていると思った。だがその姿に、石像のような冷たさを感じはしなかった。

一心に祈っていたためか、像の陰に隠れている私の存在には気付かず、祈りを終え像に向かい微笑むと、月のない戸外へと出て行った。

その姿が、何故か目に焼き付いていた。

侵入者を自ら招き入れた女は、何も言わず、じつと私を見ていた。私は女の次の動きを待った。どう動くのがよいか、女を脅し、逃れるまでの安全を得ることが出来るか、判断に迷っていた。

張りつめた沈黙を破るように、突如、背後で鈴の音が三回響き、壁を隔てた先から、くぐもった声が呼びかけた。

「鏡の巫子様、アイルーナ様。件の賊が闇に紛れ逃げておるそうにございます。賊めは手傷を負っているとのことですが、こちらに変わりはございませぬか？ 御身に、変わりはございませぬか？」

衛士ではないようだったが、声は壮年の男のものだった。

女は、声の方へ振り返ることはせず、私に微笑すると、涼やかな声で無事を伝え、「沈思の行」をするため、明けまでは何者も近付かないで欲しいと言い添えた。

男の気配が消えると、女はいま一度、私の様子確かめるように見、数歩、私に歩み寄った。

私は僅かに身構えたが、それ以上に動くことが出来ず、女が近づくのを許した。

「ここへは何人も、私の許しなく入ることは出来ません。どうか、御安心下さいませ」

私の目を見ながらそう告げると、女は私の腕に視線を落とした。

「怪我を、しています。 手当てを、させて下さいませんか？」

女の細く長い指が、私の腕に触れた。

裂けた皮膚から流れる血に、女の白い指が染まるのを見て、私はとっさに腕を払った。

女は少し驚いた顔をしたが、少し困ったように微笑み、再び私の腕に手を添え、椅子に腰掛けるよう促した。

逆らおうとしたが、女は私の顔を正面から見上げ、「お願いします」と短く言った。

淡い緑の瞳が、真実私を気遣っていることは分かった。 その眼差しに、私は逆らえなかった。

私が大人しく座ると、女は子供のように嬉しそうに微笑み、治療を始めた。

「あんだ、巫子だろう。 テイルナの 精霊王殿 に行くつていう。 八年に一度選ばれる巫子の長、 斎王 になるつていうのは、あんだだろう？ 精霊王 の言葉を、直接聞くことが許される、たった一人の人間なんだつてな。 神の言葉を大陸各地に伝える、とても重要な役目だから、五都市の長よりも偉くて、 神 と同じように敬われるんだと町の噂で聞いた。 自分達の町からそんなお偉い巫子様が出たって、近隣の町の人間まで集つて、キソスの町はちょっとしたお祭り騒ぎだ。 お陰で、余所者の俺でも入り込み易かつたし、昼も夜も市が立つて、物が捌き易い」

長い睫毛の下で、女の瞳が動いた。

間近で見る女の顔は、思い込んでいた印象より幼かった。 落ちて着いた言葉遣いや所作から、私より幾つか上であるうとは思われた

が、まだ少女のあどけなさがあった。

「そうですか。町が、そんな賑わいになっているなんて知りませんでした。お祭りなんて、楽しそう。ただ、私が偉いというのは、誤りです。敬うなど。私は、誰とも変わらぬ人間です。ただ、精霊王殿の齋王、という役選ばれたにすぎません」

女は手際よく傷口を洗い薬を置くと、裂いた布を巻いた。その間、私は何の痛みを感じることもなかった。

「ティルナに行ったら、あんたは人でなくなるんだってな。その齋王とかいう、神の使いになったら、年中、神とだけ話しておかなければならないだろう？ あんた、神がいるなんて、本当に信じているのか？ 神を、親とか兄弟とか、本気でそんな風に思っているのか？ そんなものために自分を縛り付け、自分で自分の行動を選べないなんて、意思がない人形と同じだな」

私は女の顔を、皮肉な笑みで見下ろした。女は真っ直ぐ私の目を見返し、「どうでしょう」と、曖昧な微笑で応えた。

「綺麗な、黒の瞳ですね。髪も同じ色。とても深い、夜の色。星の美しい、澄んだ夜空の色です」

女はいったん言葉を切り、私の顔を改めて見つめた。一瞬の躊躇いの後、ゆっくりと言葉の続きを口にした。

「？アドラ？という国を、御存知ですか？」

女が口にした国の名に、私は身を固くした。

「現在はもうない国、だろう？」

女の顔を睨み、吐き捨てるように言った。

### アドラ王国

九年前まで、西南スアンタ高地に在った国。

私の父が治めていた小さな国。旧い火の神を信仰する、人口千人にも満たない、辺境の小民族国家だった。

アドラの大地は赤く乾き、農耕や牧畜には適さない厳しい環境だった。だが、実直で勤勉な民と、地下からの豊富な恵みが、アドラを、周辺都市に負けぬ豊かな国としていた。

私の源である地。そして、墓標の地。

その地から、私は一人、逃げた。

「あなたの面立ちは、その国の方に似ておられます。

かなり以前のことですが、私は、彼の国を訪れる機会を頂きました。その折、国王陛下に謁見を賜りました。アゼイル・ホーン王は、大変素晴らしい方でした。少し、厳しい姿をされていましたが、笑いながらお話をされる王は、とても親しげで、若輩の巫子に過ぎぬ私にも、王侯へと変わらぬ扱いを下さいました。

鷹揚な方で、心遣いの細やかな方でもあられました。ご家族のお話もして下さいました。とても大切になされていることが、言葉の端々から伝わりました。特に、一番末のお子様の事が可愛くて仕方ないと、笑っておられて。国の人々は、異教の私に、最初こそ少し人見知りをされましたが、とても素朴で打ち解けるととても優しい、親しき人々でした。彼の地を訪れたことは、私の忘れがたい思い出。宝なのです」

父のことを語る女に、私は衝撃を受けた。

国政の場には、長兄以外の同席は許されていなかった。

私は、王位の第三継承者であったが、まだ幼かった故に、国の政について聞かされることは少なかった。それでも、多少の事は次兄や母から聞かされていた。

他国の代表が訪れ、酒席を設けることは珍しいことではなかった。だが、こんな若い女が、親しげに父と歓談したなんて、とても信じられなかった。

記憶の中の父は、アドラ王としての威厳に満ちた、厳しい表情しか残っていない。

厳格だが、出自の別なく何者にも公平であった父を、私達兄弟は誇りに思っていた。

いつも眉間に皺を刻み、閣僚に支持を下している父の顔を見たことはあっても、笑う父など、私は知らない。

私の知らぬ父を語る女の言葉に、私は苛立ちを覚えた。

女は腕の治療を終えると、卓子に置かれていた水差しから杯に水を注ぎ、私に手渡した。

「でも、滅んだらう」

苛立ちは、声に露わになっていただろう。

これ以上話してはいけない、と心の一方が言った。だが、私のもう一方の心は、今まで誰に言うこともなく、胸の奥底に沈めていた言葉全てを、この女にぶちまけてしまえと言った。

あの光景を、私は決して忘れはしない。

シン・エルナイ  
正神聖教

の信者に扇動された西都の軍に侵攻され、王族はもちろん、民までも、アドラの血を引く者はことごとく殺された。

親交の深かった異国の商人に、幼かった私だけを託し、密かに逃

がした母と次兄の顔を、私の目は現在もなお、はつきりと見ることが  
ができる。

母は、私を最後に強く抱きしめ、ひとつの言葉を送ると、振り返ることなく、次兄の後を追うように炎上する王宮へと戻っていった。駆け行く商人の馬上で見た、炎の朱と血の赤に染まったアドラの市中。

通りでは、私よりも年端の行かぬ子供が、額から血を流し、母を求め泣いていた。そのひとつ横の路地では、衣を剥がれた女が、言葉にならぬ叫びを上げながら、兵士らしき男に抵抗を試みていたが、しばらくすると、その声は絶叫に変わった。炎が町を飲み込み、乾いた無機質な音の中に、数え切れぬ絶叫と慟哭が絡むように混ざり、アドラを離れようとする私の耳に追いつがってきた。

商人は私に、目を閉じ耳を塞ぐように言ったが、私の目も耳も、それらを既に深く刻み付けていた。

正神聖教の信者と、奴等に組みした西都の異神排斥論の強硬派は、エランという、奴等にとって唯一の神を讃え、旧い火の神を崇めるアドラの如き信仰を悪とし、その教えの源となる、アドラを地を灰燼に帰した。

正しき、自分達の神エランの教えを、辺境の貧しき地の民に伝え、大都市の民と同じように、エランの加護が得られるようにするのだと、奴等は喧伝していたという。

この侵略は、実際は西都がアドラの豊富な地下資源を欲し、正教の奴等を利用して行ったのだとか、アドラの中にいた不満分子が正教に救いを求め、在りもしない事件をでっち上げたのだとか、様々な噂話が飛び交った。

ティルナをはじめとする大神殿は、シン・エルナイ正神聖教と西都の強硬派の行いを、蔽として非難する宣言を大陸各地に向け発表し、兵の動

きを止められなかった西都に、真相の究明を求めた。

五大神殿揃つての厳しい姿勢に、西都は即刻、正神聖教 信者の入京を禁止すると宣言し、アドラ侵攻に加担した者達は、造反者として極刑に処し、戦闘部隊の一部を解散させた。

西都において処断が行われると時を同じに、各大神殿を中心に、逃げ延びたアドラの民を救済する動きが大陸中に広がり、生き残つた僅かなアドラの民と、支援のためアドラに移り住んだ多数の異国の民との手で、アドラは復興の道を歩み始めた。

そして、新たな アドラ共和国 が誕生した。

アドラを攻めたのは、正神聖教 と西都の一部の人間であり、大神殿ではない。ましてや、この女の与り知らぬことだと、頭では理解している。

だが、大神殿は（正神聖教）と同じ神を柱とする、私には、仇に等しい存在。

そして何より、この女は誰よりもあのエランという神に近い存在となる者。

動揺と興奮で、私の呼吸は浅くなり、目に映る小柄な女が、神殿の神像と同じ、無機質な物に見え始めた。

女は、変わらぬ静けさで私を見ていた。

むしろ、それまで以上に私が話すことを、一言も聞き漏らすまいとする真剣さがあつた。

表情は私以上に張りつめ、責められた者のように、瞳には怯えた翳りがさしていた。

「？アドラ？という国は、現在もありません。

けれど、かつての、かの王が治められたアドラとは、まるで違つと、耳にしています」

女の言葉に、私の押さえは弾けた。  
自分でも意外なことに、笑いが漏れた。

「あんだ、俺なんかといて、怖ろしいと思わないのか？俺が子供だから、そんなに落ち着いていられるのか」

私は、椅子を蹴り倒すように立ち上がると、杯を床に叩き付け、女の横面を、ありったけの力で殴った。

殴られた勢いで、女は椅子ごと床に倒れたが、厚い絨毯が、その衝撃と音を吸収した。

女は予想より早く、上体を起こそうとしたが、私はそれよりなお速く、女に馬乗りになり再び顔を殴りつけると、左手で両手首を押さえ、その身を覆う衣を力任せに裂いた。

女の肌は、白く蒼ざめていた。

首にかけられていた銀細工の鎖の先に、女の瞳と同じ淡い緑の貴石が光を湛えていた。それを引きちぎり投げ捨てると、女の身体からは一切の色が消えた。

身体を縁取るように流れる白銀の髪が、灯火の光を映し、流水のように輝いていた。

憎しみに駆られた子供の目にも、女の姿は清らかで、美しかった。

「あんたはこんなこと、されたことないだろう？巫子というのは、祈りを捧げる神とやらに、その全てを捧げていると聞いたことがある。一生を独り身で送るんだってな」

女は言葉なく、ただ私の顔を見ていた。

怯えるでもない、蒼白い静かな表情が、私の怒りを更に激しいものにした。

この女を、滅茶苦茶に壊してやりたい。

誰よりも、奴等の神に近いこの女を、惨めに、汚してやるう。

そんな思いが私を支配した。

それは、故郷を奪われた私の正当な権利であり、報復なのだ。

女の肌は、見た色のままに冷たく、しかし、その冷たさに反し、確かな鼓動は私のもの以上に速かった。

だが、鼓動とは裏腹の、あまりの無抵抗に違和感を覚え、私は女の顔を覗き見た。

淡い緑の瞳には、光が宿り揺らめいていた。

天井よりも遙か先を見るような眼で、無言のまま、涙を流していた。

その涙に、私は僅かだが痛みを感じた。

「怖ろしいなら、あなたの信じる神とやらに祈ったらどうだ？  
俺を遠ざけたければ、さっきの男を、呼べばいい」

女は瞬きもせず、震える唇から擦れそうな声を出した。

「……やはり、アドラの方、ですね」

「だとしたら、どうする？ 俺を、あの騎士に引き渡すか？  
エラン神に下らなかつた、辺境の民族の生き残りだと、見せしめに殺すか？」

女はゆっくりと視線を動かすと、私の眼を真っ直ぐに見た。瞳に留まっていた涙は、光ながら零れた。

「大神殿は、シン・エルナイ正神聖教を自分達とは異なる存在としているらしいが、所詮、根は同じだ。自分達の神と教えを唯一とし、他を見下しているんだろう？ あんたも俺を、侮っていたんだろう？ 神殿に盗みに入りしくじった、何も出来ぬ子供と、自分が助けてやら

ねば命を落すだけの、哀れな小盗人の子供と同情し、だから、匿った」

女は僅かに手を動かし、手首を押さえる私の手に、そっと自分の手を沿わせた。

その時始めて、震えているのは女ではなく、自分であることに気付かされた。怖れているのは女ではなく、私自身であったのだと。私は虫を払うように、女の手を振り払うと、上体を起こし、高い位置から女を見下ろした。

「怖ろしいのは、あなたではありません。怖ろしいのは何も知らずにいた、私自身。あなたのどうしようもない怒りが、悲しみが、こうしていても、苦しいほどに感じられる。けれど……」

女は目を伏せると、自由になった両手で顔を覆い、詰まりながら言葉を続けた。

「私には、あなたにかけられる言葉が、なにひとつ、思い浮かばない……のです」

声もなく涙を流す女を見ているうち、私は、自分のしようとしていた行為に躊躇いを感じ始めた。

小さな躊躇いは、自己への嫌悪感と、空虚な失望へと替わっていた。私は女に、もうそれ以上何をする気にもならなかった。

女の上から身体を起こすと、すぐ横の床に、私は膝を抱えるように座った。

女も、しばらくして起き上がると、裂かれた衣の端を寄せ、私の斜め前に座った。

「アドラは、正神聖教と、西都の軍団兵に攻められた。」

その一か月前、アドラに訪れていた 聖教 の司祭が不審死をした。その死はあまりに不自然で、 聖教 は即座に、アドラの陰謀だと決めつけ、西都と手を組み、アドラの人口の三倍以上の兵を送り込み、王宮を制圧し、王族を皆殺しにし、町を焼いた。

西都は、軍の一部の造反者が暴走したのだと説明したらしいが、聖教 を助けた国に違いない。 そんな西都や 聖教 の奴らが、いま、あの地を

下唇を噛んだ際に切れたのか、口の中にじわりと血の味が広がった。

いったん話し始めると、言葉は、頭の中で組み立て終わらないうちに零れ出し、もはや止めることは出来なかった。

「あんたが言ったように、？アドラ？という名の国はあるだろうか。だが、国名が同じだとしても、あの国はもう、俺の知るアドラではないんだ。 アドラの大地はあっても そこにアドラの民はいない。 正教 の奴等が、ひとつの国をこの地上から消した。お前達と同じ、エランを神とする、奴等が

女はじっと、私の言葉に耳を傾けていた。 私が言葉を途切らせても、次の言葉を待つように、ただ、私の顔を見ていた。

「 アドラの王は、アドラの神を信じる者は、最後まで闘った。だが神は、国が滅びるのを見ていただけだ。 女達の祈りも、子供が救いを求める声も、神とやらは見も聞きもしなかった。 アドラ王を、無辜の民をも、見殺しにした。 神なんて、何も助けにはならない。 いくら信じたって、それは生きる上では、実際には何の救いにもならない……」

私の絞り出すような言葉に、女は僅かに俯いた。 私は私で、自

分の言葉に虚しさを感じ、頭を振った。

「 違う。 神なんて元々、関係ないんだ。 事実、アドラは旧  
い国だったんだ。 ずっと、勧告の使者は来ていたんだ。 聖教<sup>エルナイ</sup>  
を受け入れると、周辺国の王までもが、説得をしに来ていた  
前兆はあったんだ。 けど王は、アドラの教えに従い、受け入れ  
ることを拒み、殺された。 きつと、奴らの言うように、愚かだっ  
たんだ。 自分達の伝統に固執し、民までも巻き込んで 。 国  
が滅んだら、死んでしまつたら、何にも ……」

私の横には、私が打ち捨てた杯が転がっていた。 杯から零れた  
水が、絨毯の赤をより深い色に変えていた。 その水染みは、大地  
を染める血の赤のように映った。

鈍い光を返す銀の杯を拾うと、女は立ち上がり、そつと小卓の上  
に置いた。 続いて私の手を取ると、立ち上がらせ、起こした椅子  
に腰掛けさせた。

女は私の前に膝を付くと、私の顔を見上げた。 瞳からは未だ涙  
が零れていた。

「 …… 何故、泣く？ あんたが、したことじゃないだろう。 それ  
とも俺が、あんたの神を責めたから、泣くのか？」

女は僅かに首を振ると、長い沈黙の後、それまで以上にか細い声  
を出した。

「 鏡、なのです。 私は、夜空の月と同じです。 私の前にあ  
る、あなたの心の光を映して、返しているだけなのです」

女は胸の前で手を組み合わせ、私から視線を逸らした。 その姿  
は、言葉を探し逡巡しているようだった。

「けれど、この涙は私のものでもありません。私は、アドラが攻められていることを知っても、何も出来なかった。かの王が、民人が命を落としたことを知っても、弔いに行くことも、花を手向けることも出来なかった。壁に囲われたこの地で、ただ祈るしか。私は無力で、何も出来ぬ、小さい存在であることを、思い知らされました。もとより、私に何ができたとは思えません。が、？もしかしたら？の可能性を思い、涙にくれて……」

自分の気持ちを抑えるように、女は言葉を切り、視線を床に落としました。

「何者がしたことであれ、どのような経緯であれ、アドラに行われた、起きた事実は変えようのないものです。私は、確かに直接に関わりはないかもしれませんが、しかし、関わっていないことであれ、あなたの言葉を避けることはできません。私は知らなくてはいけない。現実に、体験することは出来ません。けれど、私なりにあなた方の怒りを、憎しみを、悲しみを、察することは出来ます。今だけであれ、私を責める事でああなたの気が晴れるのであれば、気の済むように、いくらでも私を責めて下さい。ですが」

再び言葉を切ると、彼女は真つ直ぐ私の目を見た。その瞳は、それまでにない決然とした意思を感じさせる、強い光を宿していた。

「ですが あなたの国の王を、あなたの民族の心を、否定するよ  
うなことは、なさらないで下さい。あなた自身を傷付けるような  
ことを、しないで下さい」

言葉を終えると、彼女は隠すことなく涙を流し続けた。瞳には、

彼女を見下ろす私の姿が、揺らめきながらもはつきりと映っていた。パタと、膝に何かが落ちた。　続けて数回、同じものが膝を打った。　滴だった。

それが、自分の目から落ちてしていると気付くのに、少しの時間を要した。

私も泣いていた。

どうしてよいか分からず、椅子から立ち上がり彼女に背を向け俯いた。

涙を止める術を、私は知らなかった。

しばらくの間、彼女は私の様子を見守っていたが、私の脇に歩み寄ると、「触れても、よいですか？」と、躊躇いがちの許可を求めた。

私は何も答えなかった。

彼女は、一方の手で私の手を取ると、いま一方の手で頬に触れ、そっと、私の頭を自分の肩に寄せた。

並び立つと、私の方が頭半分は高かった。

彼女の肩は、触れただけで壊れそうなほど華奢きゃしゃだった。

頭を預けた私を、彼女は少しぎこちない仕草で、包み込むように抱いた。

細く、頼りなげな彼女の腕の温もりは、母に抱かれた遠い日を思い起こさせた。

家族と過ごした、安らぎに満ちた幸福の日々と、別離の日。その双方が、私の中でひとつに溶け合い、溢れ出るようだった。

ほんの僅か前に触れた彼女の肌は、冷たく、凍えたものに感じられたが、今触れる手も頬も、柔らかな温もりに満ち、その温もりが私自身が気付かずにはいた胸中のしこりを、ゆっくりと融かしていくようだった。

私は、彼女の肩に顔を埋め、泣いた。

彼女もまた、私の頭を抱くようにして、涙を流していた。

どれくらいの間、私達はそうしていただろう。

> i 1 3 2 4 8 | 2 4 0 <

## 第2話 : 欠けたもの

2：欠けたもの

暖かな光に包まれた室内には、ほのかに甘い香りが漂っている。

脇机に置かれたコップからは、温かな湯気が立ち上る。

横たわる寝台のシーツもふんわりとした布団も、陽の匂いがする。全身の痛みも、先程飲んだ薬が効いてきたのか、あまり感じなくなつた。

気を緩めると、落ちるように眠ってしまいそうだったが、まだ眠りたくなかつた。

「まだ眠れないのかい？」

カラの寝台横の椅子に座っていたナハが、頭を掻かきながら顔を覗き込む。

大きな手がカラの額に触れた。手のひらの、ひんやりとした感触が気持ち良かった。

「やはり少し熱が上がつたな。辛いかい？」

カラは頭を振つた。

「あ、の……あの男の人は？」

「安心、とはまだ言えないがね。今は深く眠っている。彼にはイリスミルトが付いているから大丈夫。心配はいらないよ」

ほっと小さく息を吐いた後、カラは改めてナハの土色の瞳を見た。幾度か口を開きかけたが、なかなか言葉を切り出せずにいると、ナハがくすくすと笑った。

「本当に聞きたいのは、アルのことだろう？　それがね　」

少し沈痛な表情で言葉を切ったナハの腕に、カラはすがりつくようにして半身を起した。

ほんの少し動いただけで、軋きしむような痛みが全身を貫く。

「思った通りの反応だなあ。ごめんよ、心配させたね。さあ、横になって。痛みは身体の悲鳴なんだから、助けてあげなくてはいけない。君の、身体なんだから。私にできるのは回復の手助けだけだ」

ナハはゆっくりとカラを横にさせると、にっこりと笑い、くしゃっと頭をなでた。

「安心しなさい。アルも熱を出してはいるけど、身体に問題はなから。まあ、しばらくは寝込むことになるだろうけど、年中跳ねまわっているあの娘こには、いい休養になるさ。君が元気になったら見舞いに行つてあげるといい。負けん気が強いから、刺激されてより速く元気になるかもしれない？」

ぱっと明るい表情を見せた次の瞬間、カラの表情は複雑に曇る。

( あんた……誰？ )

地下での、アルの言葉が耳から離れない。

カラの呼びかけに、アルは瞳を開けた。

目覚めた直後は、多少意識の混濁こんたくがあったかもしれない。

だがしばらくすると、瞳にははっきりした意思を感じさせる光が戻った。

自分の名を呼び続けるカラを、アルの黒の瞳ははっきりと映し、じっと見つめ返した。

「あんた誰なの？ あたしを、知っているの？」  
嘘をついている眼ではなかった。

本当に、目の前にいる少年が誰なのかわからず、戸惑いを感じているようだった。

「アル、僕だよ？ 覚えてないの……」

名乗ろうとして、自分自身が、自分の名を口に出来ないことに気付く。首に下げていたペンダントの側面をなぞり、ようやく自分の名を思い出した。

名乗った。

けれど、アルは思い出さなかった。

何度名乗っても、思い出すどころか不安を募らせるばかりだった。終には、二人の元へ戻ってきたナハへ、アルは救いを求めた。

ナハのことはしっかりと覚えていた。

忘れているのは、カラの事だけだった。

どうして？

呼ばれる《名》がないこと、「自分」という存在を覚えていても  
出来ないこと。

どうってことないと思っていた。

しかし、実際に面すると、想像以上に衝撃的だった。裏切られたような、嫌な気分。

何故思い出してくれないの、と、責めるように言ってしまうそう

だった。

すべては、自分が 闇森の主 と取引をしたせいだとわかっていても。

あの時のアルの表情を思い出すと、泣きたい気持ちになる。

慌てて布団を引き上げ、滲みかけた涙を押さえた。

気恥かしさを覚え、金の瞳だけを覗かせナハの表情を伺う。

「元気になったら、アル、思い出す……かな？」

ナハはカラの寝台に頬杖をつく、「ふむ」と言い少し間を置いた。それからまた、カラの頭をくしゃくしゃと撫ぜると、にこやかに笑った。

「今はまず、ゆっくり休むことが大事だよ。カラ」

ナハの言葉が終らぬうちに、カラの瞼は落ち、しばらくすると小さな寝息があがった。

まだ幼い顔には、多数の切り傷や打撲痕がある。 睫毛の陰には、僅かな滴が見られた。

『 寝たのかい？ 』

「ぐっすりだよ。 やはり相当疲れていたんだな。 君もお疲れ様

どうだった？」

振り返ることなく言葉を返したナハの肩に、女の腕がするりとかけられる。

『 自力で動ける獣は野で放った。 動けぬ奴等はファーエンのセラ

ムの所へ送ったよ。大半はただの獣も同じだが数頭、かなり濃い血を継いだのがいたね。あれらは、この先も狙われる可能性があるだろう。』

「セラム殿の下ならば 聖教 も迂闊うかつには手を出せないか。もしかして、迎えには東の 風の王 自らが来たのかい？」

首にまわされた腕をやんわりと解き、ナハは背後に立つカナルの顔を見上げた。

『あたしも東の 風 も、厄介な奴を相方あいかたにしたものだよ。 四王 を顎で使うとはいい度胸だよ。 セラムにしる ナハ、お前もだよ』

はは、と苦笑し立ち上がると、ナハはカナルの紅唇に軽く唇を重ね視線をカラへ戻す。

「何事も、終わってみないと良し悪しは決められないけれど、私はこの先の結末に関わらず、君との出会いは良きものだと思っ  
ているよ」

『 関わり続ける気か？ 』

カナルの緋色の瞳が光を帯びる。 頭を掻き軽く肩をすくめると、ナハは笑顔を消した。

「いくらラスターでも、一人で何もかもは無理だろうさ。 今回、この子への援助を頼んできたことだけで、あいつにしてみれば奇跡的な行動だろう？ 長い付き合いだし、ここで引いたら、いくら穩おん健主義けんぎの私でも後味が悪い。 それはカナル、君もだろう？」

確認、というより断定に等しい言葉を言い終えると、ナハはふつと笑った。 応えるように、カナルも艶のある笑みを浮かべた。

『 どの面下げて？ 穏健？ を言うか知らんが、半端に関わって面倒になったら知らぬ顔をするなんざ、あたしの性には合わんな』

軽く唇を重ねナハから離れると、カナルは寝息を立てるカラの顔を見、続いてその足元で寝ている黄色の蜥蜴とかけに視線を移した。

「面白いよね、彼。 私は置いていても大丈夫とを感じるんだが、君はどう？」

笑いを含んだナハの言葉に反応し、ナジャは閉じてい眼を開け、目玉だけを動かしてみせる。

『？ 竜？ と呼ばれる蜥蜴とかけよう様の聖獣は数種いるが、こんな半端でみようちきなのは見たことがないよ。 お前、何なんだい？ 火を吐いていたが、単純な火竜ではあるまい？』

カナルの問いに、ナジャは煩わしげに尾を振り、すぐに眼を閉じた。 カナルはふんと鼻を鳴らし、顔にかかる長い髪を背に流す。

『やはり、気に喰わないね』

「？ 気に喰わない？ だけなら問題なしだな。 さて、では私達も一休みしておこう。 でないと後が続かない。 寝台で寝られるなんて、またしばらくないかもだしね。」

\*

一面は白く霞んでいる。

暗くはない。

けれど、明るいとも感じない。

光があるわけではない。

けれど、闇もない。

時は過ぎてている。

けれど、過ぎゆく時間を感じる術もない。

ただ、そこに在<sup>あ</sup>れと命じられ

居続けた世界。

永遠に、変わらないはずだった。

一筋の光が射した。

世界は 一変する。

激しい衝撃が、地下空間を揺さぶる。

数回の突き上げるような震動の後、硬い岩盤に亀裂が走る。だが、それらが崩れ落ちる様子はなかった。

南の地の王であるカナルが、地下の状態を保っていることを

ラスターは知っていた。

しかし、ラスターを捕らえるため寄せ来た男達は、そのようなことを知る由もなく、いまにも天井が落下してくるかもしれない、非常に危険な状況に動揺を隠せなかった。

目の前の青年を捕らえず戻れば制裁を受け、このまま地下に留まれば、生き埋めになるのではないかという恐怖との板挟み。

ラスターの背後に、時折亡霊のような男が見え隠れする。周囲で燃え盛る炎のように、青白い光を放つ姿は、男達に不気味な圧力をかけ、ラスターへ近付くことを躊躇させる。

無益な殺戮を避けるため、炎帝自身があえて姿を現し見せることで、牽制けんせいをしていた。

それでもなお、見ることが出来ない人間もいる。そういった者には、炎帝は陽炎が揺らめいているようにしか映らない。だが、その場を満たす不気味な力の存在だけは感じていた。姿が見えるにしろ見えないにしろ、そこに、人外じんがいの存在があること、そして、それが圧倒的な力を有していることは、本能で理解したに違いない。

ラスターの瞳は炎を映し、鮮やかな青に輝いている。周囲には青白の火焰が、巨大な蛇のように蠢き、ラスターに近付こうとする者があれば、その者を捕らえ喰らっていく。

「化物だ ……」

誰かの口から、一言が洩もれた。

たった一言。しかしそれは波のように、口から口へ伝わるに従い、「恐怖」という大波に変わっていく。ラスターを取り囲んでいた人垣は波に削られる土手のように、次第次第に崩れ始める。

そこへ、一陣の風が吹き付けた。

呼吸することも許されぬような強風に突如襲われ、その場に倒れる者が多数出た。

風が去ると、悲鳴と混乱が生じた。 浮足立った男達の上へ、更に数回凶暴な風が吹き下りた。

四方を岩盤に囲まれた地下で、何処から吹いてくるか知れない風に追われ、男達は喚き、我先へと狭い通路を走っていく。

『私がない間にことを進めるなんて、水臭いじゃあないか？ ユーシイス・ディアナ』

場違いなほど明るい声が響く。 空間を明るく照らしていた炎帝の炎が大きく揺れる。

『あの程度の風で崩れるなんて、やりがいのない奴らだな。 もっとも、早めの退却は、人間としては賢明な判断かな？ 人間の器は脆弱だからな』

「戻られたか」

ラスターの周囲に微風が立ち起こり、炎で蒸されていた空気を冷やしていく。

『ただいま。 やあ、サーラム。 君に直に会うのは何年ぶりかな？ ふふ、相変わらず無愛想だね』

小さな渦を巻く風が解けると、中心に淡い金の髪をなびかせた、人懐こい笑顔の青年が現れた。 濃い青の瞳は、悪戯いたずらをする子供のように輝いている。

「シリィン」

たしなめるようなラスターの言葉に、シリィンは軽く肩をすくめる。

『私にはいつも使い走りをさせて、炎帝の力ばかりを頼るのはずらいんじゃないかい？ 私達は四属の代表として、ユーシイス・ディアナ、君を護る勤めを等しく担っている。たまには私を、頼ってくれてもよいのじゃないかね？ 本来、直接役を担っていない南の地の王 まで、協力をしているみたいじゃないか。 もつとも、カナルは 地 ティダの代理のようなものだし、 水 のイーディは、相変わらず静観を決め込んでいるようだがね』

シリンが地に下りると、盛んに揺れ動いていた炎が、押さえこまれるように弱まる。

『ユーシイス・ディアナ うん、めんどくさいな。 ラスター、でいいか。 おまえ、ここが地下だということを忘れていないか？ 密閉された空間で炎帝の力ばかりに頼っていたら、同じ地下にいる生あるものは、焼け死ぬ前に窒息死するだろう？ おまけに、この地下の臭いときたら堪らない。 よく平気でいられるな？ 取りあえず空気を、風の流れを作らせる。 風の流れが出来れば、其々の吐きだす息が、何処から流れ出すかも判り居所いどころを掴みやすい。 ウルド を早く見つけ出したいのなら、仕える手駒てまは有効に使うことだ。 サーラム、君もそれに文句はあるまい？』

ラスターの背後に立つ炎帝サーラムに、西の 風の王 シリンは、屈託のない笑顔を向ける。 炎帝は、僅かも表情を変えることなく、「決めるはこの者」とだけ言った。 シリンはくすりと笑うと、ラスターの肩へ両腕を巻き付け、その表情を興味深げに伺う。

『東の 風の王 には話をつけてきた。 西 の私が 東 のこの地で自由に動くことを黙認する、とね。 そうそう。 お前の師

セラムも息災そくさいにしていた。お前が気にかけていた？いま一つ？の世話に、少々手こずっているようではあったが。詳細は後で聞かせるが 似ていたよ』

シリンの言葉に、ラスターの瞳が僅かな動きを見せる。その変化を見て、シリンはラスターの肩を叩き、ふわりと宙に身体を浮かせた。

『さて、ラスター。全てはお前次第だ。先ず、何者の居所を知りたい？ ウルド を選ぶと、お前の相方の有翼獣を選ぶと、私達は口を挿むことはしない。あの有翼獣はお前の半身のようなもの。それを先に救うことに動いても、私に異存はない。人間というものは、長年共にあった存在ものが欠けると、激しい喪失感に苛まれると聞く。お前は 関わりないのかな？』

微笑を絶やさないシリンの顔を、ラスターは石像のように動かない表情で見た。

「 貴方の言いたいことが、分からない」

『そう言うと思ったよ』

軽いため息交じりに笑うと、シリンは瞳を閉じ、周囲の空気を手繰り寄せるように抱え込んだ。

淡い光が生じた後、シリンの手の内に長剣と剣帯が現れた。

無造作に、シリンはそれをラスターへ放った。

見慣れた黒茶の剣帯と白銀の剣。

地下牢へ入る前、レセルⅡホーンに渡した、長年愛用していた剣。

『お前のだろうか？ 倉庫らしき部屋に存在を知ったのでね、ついで

に盗ってきた。アラスター＝リージェス。お前は、我等 四王の力を極力借りず、奴とのケリを付けたいのであろう？ ならば、最低限身を護るためそれは必要だ。使い慣れた物を使うのが、一番効率的だろうからな。とは言っても、たまには援助を求めてもらえると、私としては嬉しいのだがね。 見ているだけなど退屈で仕方ない』

宙で猫のように伸びをしながら、シリンは無邪気に笑った。

視線を剣へ落としていたラスターは、シリンへ目礼すると、剣帯を腰に巻き、改めて剣を抜き状態を確認した。 白銀の刃には変わらず、五つの神聖文字が薄い光を放っている。

剣を鞘に戻すと、ラスターは宙に浮くシリンの顔に視線を定めた。

「あれの居所は、どれほど離れている？」

「道が入り組んでいるが遠くはない。カナルに、おおよその地下構造は聞いたのであろう？ この地下の人間共が 祭壇 と呼ぶ禍々しき部屋の、奥に開けた空間から、血と肉の腐臭が漂っている。

これが ウルド の臭いであろう』

シリンは瞳を閉じ、腕を大きく広げる。

周囲の空気が大きく動き、シリンの金系の髪が柔らかな波を描く。

『どうでもよいかもしれぬが、喜べ。 ほぼ同じ空間から、お前の有翼獣の息も感じられる。 何れかを見出せば、確実にもう一方も見つかる。 だが、うかうかは出来ぬな。 数名の人間が同じ空間にいる。 ウルド を移動させる算段を付けているのかもしれない。 この距離ならば、風で裂き、足止めするも可能だが 如何する？』

先へと延びる暗い道の彼方を、ラスターは見据えた。

「 無用」

『 だろうな。 まあまずは、淀んだ空気を清めるとするか。 サイラム。 悪いが、君の炎は一旦消させてもらおうよ』

シリンの手が緩やかに動く。 その動きに合わせて、炎帝の炎は消え、周囲は闇に沈んだ。

### 第3話：光ある庭

#### 3：光ある庭

小鳥のさえずりで目が覚めた。

昼に近いらしく、窓から差し込む光は少ないが、それでも室内は十分に明るい。

仲間と鳴き交わしながら飛び回る小鳥の影が、時に窓を過る。

楽しい声に誘われ、まだ痛みの残る身体を寝台から下ろし、窓へ向かい、開ける。

外気は思った以上に冷たい。だが、窓から見える中庭の緑は暖かな光にくるまれ、うとうとと昼寝をしているようだった。

コツコツと、控え目なノックの後、ゆっくりと扉の開く音がする。一晩かけて煮込まれた野菜の甘さとパンの香ばしい香りがふんわりと漂ってくる。

「カラ、起きていたのね。窓を開けているの？　あまり身体を冷やさないようにね」

のろりと視線を向けると、シヨールを羽織ったイリスミルトが、少し大きめの盆を手に入ってきた。

盆を小卓に置くと、イリスは迷うことなく窓辺にいるカラの横へ歩み寄り、そつと額に触れた。

「熱はすっかり下がったようね。どこか痛むところはない？」

カラはただ横に首を振った。目の不自由なイリスには、言葉に

出さなければ伝わらないと思ったが、声を出してまで答える気には  
ならなかった。

口を開かないカラの目線まで腰を落とすと、イリスはカラの右手  
を両手で包んだ。

「カラ、アルが目を覚ますには、もう少し時間がかかると思っ  
けれど、お薬が効いて熱もほとんど下がったから安心して。心  
配をしてくれて、ありがとう」

イリスの言葉に、カラは俯むすいた。

ナハがカラとアルを地下から連れ出して、三回目の朝を迎えてい  
る。

地下での疲労が原因か、旅籠に戻った途端、カラもアルも高熱を  
出した。

ナハの処方する薬の効果か、カラは、傷の痛みは多少残っていた  
が、翌日には起きて食事を取ることもできたが、アルは、外傷はす  
っかり治っているというのに、深く眠ったまま目を覚まさない。

昨日、カラはイリスに付き添われアルを見舞った。

地下での記憶に間違いはなく、アルの長い髪は白銀色しろがねだった。

青白い顔と淡く輝く白銀の髪が、アルを作り物の人形のように見  
せる。

何度も呼びかけた。けれど、アルが眼を開くことはなかった。

規則的な息をしているので、生きているには違いない。それで  
も、地下で血に染まり横たわっていたアルの姿が瞼まぶたに甦ると、どう  
しようもない不安に襲われる。

ナハもイリスも心配はないと言うが、医学や薬学の知識がないカ  
ラは、アルが目を覚まし元気な声を聞かせてくれない限り、安心な  
どできない。

「お腹、減ったでしょう？ 冷めないうちに食べましょう。 わたくしも一緒にいいかしら？」

カラは再び首を横に振った。

「 知らない。 お腹なんて、減ってない……」

握られた右手を離してもらおうと、カラは左手でイリスの手を押しさえ引つ張ったが、逆に、イリスの手がカラの両手を捕まえた。

「カラ。 ご飯を食べたら、またアルに声を聞かせてくれるかしら？ そうね、？アルの寝ぼすけ？くらい、言ってもらっていいかもしれない。 あの子、すぐむきになるでしょう？ お薬よりも、あなたの言葉の方が効き目があると思うの。 アイルーナも、同じようなことを言ったのでしょ？」

おっとりとしたイリスの言葉に、カラは顔を上げ、灰緑色の瞳をみつめた。

「 アルの、お母さん？」

「そうよ。 けれど、お腹が減ったままの涙声ではだめね。 そんな声を聞かせたら、後でアルに意地悪を言われるわよ？」

イリスに促され、カラは鼻をすすりながら、湯気の上がる皿の並び小卓へと向かった。

どこから現れたのか、小卓の下ではナジャが不機嫌そうに尻尾で床を叩き、食事の催促をし続けていた。

\* \*

「やあ、カラにナジャ」

戸外に面した通路をぼんやり歩いてきたカラへ、ナハが声をかけた。

「今日の陽は、弱すぎず強すぎずで気持ちがいい。室内ばかりにいても身体に良くないから、ここへ来て日向ぼっこでもしないかね？ ついでに、私の話し相手になってもらえると嬉しいのだけど、どうだい？」

中庭の数か所に置かれた長椅子のひとつにナハはゆったりと腰かけ、煙管キセルをくわえ手招きをしている。

午後になり陽はずいぶん西に傾いていたが、庭の中は少し黄色がかった光に満ちている。

光に満ちた庭へ出ることに、カラは躊躇ためらいを感じた。じりと後ずさる。

なんで ……？

室内の灯明よりも強い陽光が、怖い。

イリスの旅籠に戻ってから、カラは一度も外へ出ていない。

体調が優れなかったのだから当然ではあるが、それも三日程度のこと。

《影》を奪われてからの時間が経つにつれ、陽光の下にいたことが「辛い」と感じることは増えていた。

理由は解らないが、身体に負担がかかっているのだと漠然と感じていた。

だがこんなにはつきりと、恐怖、を感じることはなかった。

光の中に入ると想像しただけで皮膚に痛みを感じ、眩暈すら覚え

る。

何故こんな感覚になるのか、カラ自身理解できない。理由の分  
からない怖れが身体を縛り、カラの足をすくませる。

『これしきの陽光にひるむなぞ、ワシもとんだ腰ぬけ小僧と契約し  
たものよ。石牢に閉じ込められた間に糞碌せつろくしたかの。光が怖い  
んなら、ほれ、さつさと部屋へ戻れ。ワシは陽あびに焙あびられるより、  
寝台で毛布にくるまって気持ちよく昼寝したい』

当然顔でカラの肩に乗っていたナジャが、大欠伸おおあくびのついでにわざ  
とらしく熱い鼻息を顔に吹き付けた。

火の粉が混じっていないだけ加減はしているのだろうが、鼻息の  
かかった頬はひりひりと痛む。

「誰が怖いなんて言ったんだよ。布団の上で寝たきや自分の足で  
戻ればいいだろ、ナジャ、太り過ぎなんだから」

冷えた手で頬をさすりつつ睨むと、ナジャは硬い尾でカラの後頭  
部を打ち、見た目にそぐわぬするりとした動作で下りた。

『樹液を絞りきった、棒きれの如き小僧が何を言おうと虚しいだけ  
よ。陽光を浴びて枝葉を茂らせる木々の若芽の方が、お前よりよ  
ほど喰いであるというもんだ』

額の、第三の眼でカラの姿を捉えたナジャは、「ししし」とい  
つもの笑いをすると、くるりと向きを変えのしし歩いていった。  
打たれた後頭部をさすりながら、横目ですんぐりとした後ろ姿を  
見送ったカラは、視線を中庭へ戻した。

視線の先ではナハが空を見上げ、くわえた煙管あそを上あそに下あそに玩あそぶよ  
うに動かしている。

カラは両拳を握り、少しぎこちなく足を踏み出した。顔に光を受けた瞬間視界が白くなり、ぐらりと、強い眩暈めまいに襲われる。

暖かいはずの陽光が、カラの身体を冷たくし、手足を重たくさせる。

全身にチリチリとした痛みを感じ、身体が縮こまっていく。込み上げる吐き気で、呼吸が浅くなる。

「カラ。手を、私の腕に乗せられるかい」

両肩にふわりと温もりが広がる。

いつの間に来たのか、ナハがカラの前に膝をつき、地下で出逢った時と同じように支えてくれていた。

カラは重たい手を持ち上げ、なんとかナハの腕に乗せた。

「そうだ。そのまま瞳は閉じて、深く息を吐いてごらん。今度はゆっくり吸って。そう、ではもう一度ゆっくり吐いて」

ナハの言葉に従い、数回深呼吸を繰り返すうち、身体の痛みは軽くなり、手足を自由に動かせるようになった。

ナハはカラが長椅子に座るまで、カラの肩からずっと手を離さなかった。

「どうだい？ まだ気分は悪いかい？」

煙管をくわえなおしたナハは、土色の瞳でカラの顔を覗きこむ。

「ううん……大丈夫。すごく楽になった……です」

カラの頭をくしゃりと撫で、ナハは「それはよかった」と笑っ

た。

のんびりした笑顔につられホッと息を吐きだすと、身体は嘘のように楽になっていた。

ふと顔を上げると、ナハの肩にいる白鼠が、緋色の瞳で覗き込むようにカラを見ていた。

視線を合わせると、ツンと顔を背けナハの陰に隠れた。白鼠の一連の動きを見て、ナハは頭を掻きながら、申し訳なさそうに笑った。

「ナハさん。 あ、あの、色々ありがとう ござい、ます」

「そんなにかしこまらなくていいよ。 気を遣われるとこちらが緊張してしまうからね」

ナハとちゃんとした会話をするのは、これが初めてだった。思っていた通り、ナハは気さくで話しやすい。

よれよれの緑の外套を着た風貌は、ぼんやりとしていてどこか掴みどころがないのだが、イリスとは違う不思議な安心感を覚えさせる。

知りたいことが、カラにはたくさんあった。

そのひとつであるアルのことは、イリスから、僅かだが聴くことができた。

アルの母親 　つまりはイリスミルトの娘であるアイルーナは、  
齋王さいおう という特別な役割を担う巫子だったという。 八年の勤めを終えた後、キトナ大神殿に仕える騎士であったレセルと夫婦になったが、アルを生んですぐに死んでしまった。 　しかし、魂の一部はアルの中に宿り続け、アルをずっと見守っているのだという。

カラが地下で聴いた女性の声は、アイルーナのものだろうとイリスは言った。

また、アルの白銀の髪は母親譲りで、訳あって普段は黒く染めているのだとも教えてくれた。

アルは環境の影響をとても受け易い体質で、カラ達を襲ったセナの禍術まがしゅじゆや魔物の毒気といったものが、特に酷く疲労させるのだという。現在のアルは、地下で受けた影響が残っているため、眠ることで体調を整えているのだという。

これらの説明で、理解はしきれないものの、アルのことを少し知ることが出来た。

だが、ガーランとラスターのことについては、何も分らないままだった。

地下から帰った晩、「ラスターとガーランは無事だから安心なさい」と、イリスはカラに言った。

しかし、どうやってその「無事」を知ったのか、その後の状況はどうなっているのか、具体的なことは今日まで何も訊けないままにいる。

三日前、「ガーランを見つけ助け出す」という共通目的のため、アルと共に旅籠を抜け出したが、結局はガーランを助け出すどころか、周囲に騒ぎの種を撒き、自分達が怪我だけをして戻ることになった。

ナハに支えられながら戻ったカラを、イリスは無言で、ふわりと包み込むように抱きしめた。

きつく抱かれたわけではないが、それまでにはない長い抱擁だった。それから両手でカラの顔を優しく包み、金の瞳を覗きこむように「お帰りなさい」と、少し隈くまの出来た眼を細め微笑んだ。イリスの笑顔とアルの蒼白の顔が重なって、カラは涙が零れて止まらなかつた。

この後イリスは発熱したカラ、アル、そして重篤な傷を負ったセルの看病に追われた。

カラは一人早々に快復したが、他の二人はまだまだ看護が必要な状況だ。

そんな大変な看護の合間に、カラの世話も普段通りしてくれているイリスを、質問などで煩わせたくはなかった。

だから、イリスと同じくらい様々な情報を持っていそうなナハと話せる時間を、カラは心待ちにしていたのだが、いざとなると、何からどう尋ねてよいのかわからない。

「話し相手に」と誘ったナハも口を開く様子はなく、暖かな陽光を楽しむように、顔を空へ向け煙をゆっくり吐き出している。

「カラ。この煙は、これからどうなると思う？」

自分の吐き出す煙を眺めながら、ナハはのんびりカラに話しかけた。

煙はゆるゆると上るにつれ四散し、空の青へ溶けていくように見える。

「え？　あの、えっと、空に、空気の中に溶けて、消えてなくなる……」

「そうだね。だが、全てが消えてなくなる　というわけではなくて、見えない状かたちとなって存在し続けている、という見方もあるんだよ」

カチンと、煙管の先を長椅子の背で打つと、ナハは土色の瞳を再び天へ向け、大きく背伸びをした後頭の後ろで手を組んだ。

「それにしても、今日の陽は実に暖かくて気持ちが良いよなあ。

つい、うとうととしてしまっよ」

欠伸を噛み殺しながら、ナハはカラへ少し涙目の笑い顔を向ける。よく見ると、起きぬけなのか括られた髪はぼさぼさでもつれてい

る。  
イリスの話では、ナハは毎日早くから出かけているらしく、昨晚も、カラが眠りに着くまで帰って来ていなかった。

「あの、訊いてもいいですか？」

遠慮気味なカラの問いかけに、ナハは「うん？」と先を促す。

「ナハさんは毎日出かけているって、イリスさんから聞きました。何か、調べてるの？ ガーラン　　ラスターの居場所を探している、とか？」

煙管キセルをくわえたまま、ナハは頭を掻いて少し考える素振りを見せた。

「うーん、調べている、というよりは作業をしている、んだな。地下で君達を襲ったセナを覚えているだろう？ 奴と、その仲間の連中がキソスの地を、性質たぢの悪い呪いまじなで汚してしまったのでね、その呪いを解いてまわっているんだよ、地の問題を何とかするのは、地の長おのぢの役目だからね。ああ、地の長って聞いたことあるかい？　精霊使い　は知っているかな？」

「精霊使い　って、昔語りとかによく出てくる、精霊と言葉を交わしたり精霊の力を使ったりすることが出来る人でしょう？　ナハさんは　精霊使い　なの？」

ナハは物語でも聞かせるように、精霊使い、そして地の長について話した。

語られる、精霊やそれらに纏わる話を聞くうち、カラの金の瞳は従来の輝きを取り戻していく。

「すごい 地の長 っつて、石や鉄や木や、草とか花とか、大地に関係ある精霊ならみんなと話せて協力させることができるんだね！ 地 がいろんな精霊の中心にあるなんて、知らなかった！

火 や 風 の精霊が英雄と一緒にあって魔物を倒す昔語りは聞いたことあつたけど、地 も本当はすごいんだね！ 地下で一緒だった女の人がナハさんの？ 連れ？？ すっごく強そうだった。 ちよつと怖かつたけどとっても綺麗だったし。 いまは？ いまは何処かに行ってるの？」

『？怖い？の一言は余計だよ 』

周囲をキョロキョロ見回していたカラの耳に、聞き覚えのある低音の女の声が響く。

視線を戻すと、ナハの肩に手を置いた女が、切れ長の眼でカラを見下ろしていた。

「 ど、どこから ……？ 」

褐色の肌に、ぴったりとした白い長衣をまとった肢体したいを、大きく波打つ豊かな黒髪が縁取っている。

彫りの深い容貌は、アルやイリスとは種の違う美しさで、強烈な緋色の瞳は、カラの瞳と同じく自ら光を放ち輝いている。

『まだわからないのかい？ 勘働かんきの悪い子供だな』

女の緋の瞳とカラの金の瞳が真正面からぶつかる。 さつきまで  
ナハの肩にいた白鼠の瞳を思い出す。

「え……あ、あ　！」

地下での印象より、表情は幾分柔らかな気もするが、柔らかなナハ  
とは真反対の印象を受ける。

呆然と見上げているカラに、ナハは思わず苦笑を漏らす。

「改めて紹介するよ。　カラ、彼女はカナル。　こんなこと言っ  
ているけど、結構面倒見はいいから、何か困りごとがあったら相談し  
てごらん」

「ナハ、お前、自分の契約精霊を他人に貸し出すつもりかい？　小  
僧、いつまでも呆けた面<sup>ツラ</sup>しているんじゃないよ、みつともない」

カラは慌てて表情を改め、困惑気味にナハを見上げた。　ナハは  
頭を掻きながら肩をすくめてみせる。

「彼女、　地　の中では気性が激しいことで有名でねえ。　言葉の  
棘は愛情の裏返しだと思っ<sup>ツラ</sup>ていいから。　ああ、アラスター殿に少  
し、似ているのかもしれないな」

何気ないナハの言葉に、カラは引っかかりを覚えた。

「ナハさんはラスターの一番の友達だつて、イリスさんが言っ<sup>ツラ</sup>てた。  
なのになんで、ラスターのことを？　アラスター殿？　なんて呼ぶの  
？　ラスターは、親しい人間は自分を？　ラスター？　つて呼ぶつて、  
オレに最初に言ったよ？　だから、オレにもそう呼んでいいつて」

カラの素朴な質問に、ナハは一瞬驚きの表情を見せ、それからすぐに破顔した。

「これは癖だな。公の立場上、アラスター殿　ラスターは、精霊使い　よりとても高い身分にあつてね。公式の場で親しげに呼ぶと、生き字引のようなお年寄り方に怒られるから、普段から意識的にそう呼んでいたら染み付いてしまつてねえ。もちろん、二人で話す時は私も呼び捨てだよ」

「あの　ラスターって、どういう人なの？　ただの騎士じゃなくて、聖騎士っていう身分だつてアルが言つた。それって特別で偉い人なの？　オレ、半年くらいずっと一緒にいるのに、ラスターがどんな人で、何を考えているのか、全然、わかんなくつて　…」

腰に差していたオスティルの短剣に手を添え、カラは視線を落としました。ナハは言葉を挿むことなく、煙管をくわえたまま視線をカラの横顔に向けている。

「オ　レンでオレを助けてくれた時、ラスター、鍛冶屋にすごい大金を渡したみたいだつた。オレに渡してくれてるオスティルの短剣。これ、ものすごい価値があるつて鍛冶屋が、アルも言つた。これを持てるのは選ばれた人間だけだつて。よくわかんないけど、すごい大切なものだと思うんだ。それをなんで、オレなんかにくれたのかな？」

いったん話し始めると、それまで抱えていた思いが噴き出す。

「ラスターはオレに、字は教えてはくれるけど、ほかは本当に、なんにも教えてくれないんだ。話しかけてくれるのも、必要がある

時だけで……。ナハさんは友達ならわかる？ ラスターはなんで、闇森の主を追いかけてるの？ どうしてオレを旅に誘ってくれたんだと思う？ オレが《ふたつの宝》を奪われたからって、ラスターには関係ないんだから、知らんぷりしても良かったと思うんだ。でも、一緒に行こうって言ってくれたんだ」

話している内に、顔が熱くなってくる。

頭の中で色々な思いが渦を巻いて、鼻がツンと痛くなる。膝の上で拳をギュツと握りしめた。

「なのに……一緒に旅をしてるのにどうして どうしてなんにも教えてくれないのかな？ 今度のガーランのことだって。オレが子供だからかな？ ラスターは？ 騎士？ だから、？ 務め？ だから、闇森の主に襲われたオレの面倒をみてるだけなのかな？ ラスターは、本当は一人で動いた方が楽だと思っただ。オレ、こんな身体になって、人の目を気にしながらじゃないと動けないし、そうじゃなくても、この瞳のことで、化物扱いされること多いから……。だから、本当はさ、本当はラスター、オレのこと……」

裡うちにあつた疑問や不満のほとんどを吐き出したが、最後のひとつを言葉にすることが出来ず、カラはナハの顔をすぎるように見上げた。

大きな金の瞳で見上げるカラの肩を軽く叩くと、ナハは煙管の灰を落とし、外套の内ポケットにしまった。

「？ 騎士の務め？ だから君を同行しているわけではない、と、断言はできるけど 悩むだろう？ 彼、周囲に語らずに物事を進めるから。友人だから擁護するわけではないけれど、語らないのは彼なりの理由があるからだよ。彼の良い部分も悪い部分も、付き合いあっていくうちにわかることだから、私の印象をいま、君に詳しく話

すのは止めておくけれど、そうだな、あえて助言するとしたら  
ラスターは感情表現が苦手なんだよ、とても。滅多に、表情を変  
えないだろう？」

即座に首を縦に振ったカラを見て、ナハはクスクス笑った後、ふ  
つと表情を改めた。

「ラスターは自分で、自分がどんな感情を持っているのか、分かっ  
ていない場合があると私は感じている。彼は、孤立を強いられる  
環境にずっと、置かれていたようだからね」

さらりとラスターの生い立ちの一部を語ったナハは、いつもの笑  
顔とは違う曖昧あいまいな表情をしていた。更に質問しようとする、ナ  
ハは片手を上げ、カラの言葉を止めた。

「後は君が、ラスターと向かい合って話が出来るようにになったら、  
直接訊いてみるといい。彼が君に話しても良いと思えば、きつと  
話してくれる」

怒られたわけでもないのに、しょんぼりとなったカラの頭を、ナ  
ハはくしゃりと撫でた。

「急ぐことはないよ。そうだな、他に私が教えてあげられること  
は　ラスターが物を買う以外で金を渡す場合は、渡す相手を軽蔑  
していることが多いかな。あと、彼は関心のない相手には声もか  
けない。存在がないかのように、完全に無視をするからね。そ  
んな彼が誰かに字を教えるなんて、ちよつとこれまでには考えられ  
ない行動だ。カラ、君はすごい存在なのかもだよ？」

ナハの言葉に、カラはくすぐったさを感じた。　そういえば、文

字を教わっている話を聞いたアルも、かなり意外そうな反応をしていた。なんとなく、照れ笑いが出てしまう。

『 ったく、単純な小僧だ』

言いながら、カナルはカラの襟元に覗いていた紐を取り、下がっていたペンダントを引き出す。

カナルの有無を言わせぬ迫力に、カラは抵抗も出来ず、なされるがまま、大人しくしていた。

『 カラ の意味は確か ？息吹？だったな』

ペンダント側面の彫りをなぞりながら、カナルは意味あり気に、カラの金の瞳を真正面から覗きこんだ。

緋色の、強い眼差しに射竦められたように、カラの身体は動かなくなる。じわりじわりと、押さえつけるような圧力を全身に感じる。

闇森の主 に対するような恐怖を感じるわけではないが、それと変わらない大きな力をカナルも持っているのだと思った。

『 忠告だ。 魔物や精霊の眼を、長く見るんじゃない。眼が合ったら逸らせ。 力あるこれらの存在は、視線だけで他を操ることが出来る。 ただの人間には、命取りになる』

指先でカラの額を小突いた。するとそれまでの硬直が嘘のように解け、身体は硬直の前より軽く感じる。

不思議そうに自分の身体を見回しているカラに、カナルはふっと笑って見せた。その表情は少し悪戯気であったが、親しみも込められている様に感じた。何より、笑うカナルはとてつもなく艶やかで美しかった。

『 あたしの忠告が、解っていないようだねえ？ それとも一人前に、あたしに見惚れておいでかい？ 』

呆けたように見上げていたカラの鼻先に再び顔を寄せると、カナルはより艶やかな笑みを浮かべ、カラの鼻を指で弾いた。

「う、う、ごめんなさいっ」

ジンジンと痛む鼻先を押さえ、カラは顔を真っ赤にして視線を膝に落とした。

「カナル、苛めはいけないよ。君に見据えられた後は、誰だって怯えて動けなくなる」

『 はん。 まあすれていない分、あいつよりは可愛げがあるか。小僧 カラ。 奪われた《名》を取り戻すまで、このペンダントは片時も離すんじゃない。 そのオステイルもだ。 このふたつは、今のお前を魔物共から遠ざける護りであり、お前を他と結び付ける絆となる。 だが、まずは自分で自分を護る術を覚えろ。 それらの護りは一時しのぎにすぎん。 お前の黄色い太った蜥蜴も、何処まで当てにできるかわからんのだからな 』

ナジャのことを言っているのはすぐに分かった。 どうやら、カナルはナジャに好い印象を抱いていないらしい。

「危つく忘れるところだったよ、カラ。 これを君に渡さなければだった」

ナハはおもむろに、外套の内側から細長い棒を取り出し、カラの

手に握らせた。

オスティルの短剣と同じくらいの長さの、両端が銀色の金属で覆われた暗赤色の棒で、赤色部分の表面には、金色の文様が幾つも刻まれている。その柄は、オスティルの短剣の刀身に刻まれている神聖文字に似ていた。

「ぼう？」

「？棍こん？という武器の一種だね。これは君用にあつらえた特別製だ。 昨晚、ようやく届いてね」

「武器？ こんな短い棒 棍こんが？」

ナハはにつこり笑うと、棍の上に手をかざし、カラには解らない詞ことばをつぶやいた。

棍の表面の模様が薄い光を帯び、見る間にカラの背丈ほどの長さに伸びた。

棍の変化に、カラは瞳をまん丸にした。

「呪いの詞まじないを覚えれば、ある程度自在に長さを変えられる。この棍は、君のペンダントと同じユーグという木から出来ていて、樹齢の高いものは鉄より堅く非常に強い生命力を宿すと云われる。武器として使いこなすにはそれなりの訓練が必要だけど、いざとなれば杖代わりにもなるし、短剣より長い分、先手が打ちやすいから牽制効果が増す。その短剣と一緒に持つておくといいよ」

長く伸びた棍の程よい重みが、掌から腕、そして肩から全身へと伝わる。

少しひんやりとした感触は、夢などではなかった。

「 本当に、オレのもの？」

「武器なんて持たずに済むのが一番なんだけど、君の場合は持っている方がいいからね」

自分のものだという棍に、カラはうつとりと見入った。

気のせいか、カラが撫でると、応えるように表面の金文字が淡い光を持つ。

『撫でてたつて腕は上がらない。 その得物えものは間合いを詰められたら長さの意味が薄れる。 使いこなさなきゃただの棒つきれだつてことを忘れるんじゃないよ』

「はいっ！ でもあの ありがとう！！」

「礼は、私ではなくラスターに言うんだね。 彼がティルナに依頼して作らせたものだから。 精霊王殿せいれいおうてんの長が自ら、その柄の神聖文字を刻んでくれたそうだから、持っているだけでオスティルにひけを取らない護りになる」

「ラスターが？ でも、精霊王殿の長つて、誰……ですか？」

喜びと驚きが半々、といった表情でカラはナハを見つめた。 ナハは頭を掻きながら「そうか」と呟いた後、「ユリエール」ラウル「ティルナスという、聖都ティルナの王様のことだよ」と、親しい友人でも紹介するように言った。

「ユリエール」という人物は知らないが、「聖都ティルナの王」という響きにカラは覚えがあった。

記憶に違いがなければ、「ティルナ王」はこの大陸で最も貴いと

いわれる人物で、カラの大好きな英雄の一人もティルナの王になった人だ。

なぜそんな人物の名が出て来るのか、カラにはまったく解らなかった。

> i 1 7 3 2 4 — 2 4 0 <

## 第4話：四属の王

### 4：四属の王

時間の感覚はない。

昼夜の別などはなく、常に薄明るくあり、仄暗くもある。

どれほど歩もうと、いつまでも果てなど見えない、ゆるゆると膨張し続けているような模<sup>も</sup>糊<sup>こ</sup>とした空間。

影を作り出すほどの光はなく、空気は僅かにも動くことはない。

何もない。

目に映るものはない。

乳白の、霧<sup>もや</sup>のようなものが視界に満ちているが、これも本当に？  
在る？ものなのかを知りたくても、触れ、感じることは出来ない。

聞こえるものもない。

手を打ち合わせ、音を発してみたところで、たちまちに霧が音を  
その裡<sup>うち</sup>に取り込み、消しさる。

そして瞬<sup>まじ</sup>く間に、取り付く島もない冷厳な静寂が、その空間を再  
び支配する。

それがかつて、ラスターが知り得ることのできた世界の全てだっ  
た。

『 思い出すかい？ 』

西の 風の王 であるシリンは、僅かに笑みを浮かべラスターの横顔を覗きこんだ。

これといった反応を返さないラスターの表情を見つめながら、シリンは緩やかに右手を上げる。

冷たく沈んだ空気が、すうつと流れ始める。

闇が視界を覆い、腐れた血肉と焚いた薬香草の香りの、ねっとり混ざり合った猛烈な異臭が、空気をどろりと濁ったものにしていく。時折、何処かで滴が落ち、床に当り散る微かな音が耳に入る。黒い、死の臭いに満ちた空間。

あの白く、何の匂いすらなかった終わらない空間とは明らかに違う。

だが、間逆にも違う条件にも関わらず、シリンの指摘どおり、ラスターはこの空間にかつて己がいた空間を重ね見ていた。

『サーラム。 この場の浄めは、 火 が行うが手っ取り早いと思うのだが、どうかね？』

ラスターの背後で、青白い光を纏い立っている北の 火の王 炎帝へ、シリンはにこやかな言葉をかけた。

答えはなかったが、一寸の後、ラスターを中心とした円状に青白い炎の波が現れた。

炎が放つ白光に照らされ、室内の状況が鮮明になる。

八面の壁に、燃え尽きた燈芯草の黒焦げた残りくずが見える。

室の中央には、磨き上げられた夜黒石の巨大な水槽が据えられている。

内側には、黒と見紛う深い赤の液体が満ちている。

息吸うことも躊躇ためらわせる腐臭の源が、この液体であることは間違いない。

水槽からやや離れた床面に広がる赤黒い染みへ、ラスターはちら

と視線を動かした。

染みに張り付くように、黄金の羽毛が幾つか残されていたが、目にした直後、青白の炎に呑み込まれ、黒影となり消えていった。

「 シリン。 この地下の時間の流れは、地上と如何ほど差があると思われるか？」

『 そうだな。 この地下の半日が、地上の四・五日といったところだろう。 術のかけ方に斑むらがある。 場所によって若干、流れが異なるようだな』

キソスの地下は、シンリエルナイ 聖神聖教 により幾重にも呪術で護りかけられている。

呪術のかけられた空間は、術外の空間とは異なる時間の流れとなることがある。 かけられた術が高等であればある程、術内の時間の流れは遅く、ゆっくりとしたものになると云われる。 こういった現象は、力の強い魔物が棲む場所でも起こるのだという。

『 カナル達が術の半分以上を壊していったようだから、現在はもう少し速くなってはいるな。 だが、まだ影響は残っている。 地下に居るうちに捉えるか、もしくは、同時に外へ出るかせねば、面倒の幅も広がるな』

まだ炎に包まれていない水槽の傍らまで歩み寄ると、ラスターは縁に手を置いた。

赤黒い水面をしばし見つめると、縁を握るように指先に力を込めた。

ラスターの手に刻まれた刺青が白い光を帯びた瞬間、ジュンツという音と共に水槽は消える。

後には、青白の炎柱が揺れ踊る。

「ウルディ・チエン・ジエン・シャオリ」

揺れる炎を瞳に映しながら、ラスターは南の水の王の《名》を口にした。

「私の《名》を口にするとは、珍しい」

声と共に、中空に淡い光が滲みだす。

円かった光は、すうっと上下に伸びると、青みを帯びた黒髪の男の容かたちになった。

おっとりとした笑みで、ラスターへ視線を落とす淡い水色の瞳は水鏡のようだ。

「ユーシイス・ディアナ。何を求める？」

「イーディ。この地の水は、如何か？」

イーディと呼ばれた水の王は、瞳を閉じ、手のひらを地にかざすようにゆっくり動かし、ゆるりと瞼を開き吐息した。

『この地下の水 地底湖の濁りは、好ましくない。キソスの他の場所において、水にこれほどの穢れは感じられなかった。東の水の王が、人間共の術をよく防ぎ浄めてはいるが、東は広い。および切らぬところがあるようだ。東はまだ若く、手足となる水の者の力も、まだ十分とは言えない。万全にはゆかぬ』

「では貴方に、この地下の水を任せたい」

イーデイの瞳を真つ直ぐに捉え、ラスターは言った。  
その言葉を受け、イーデイは一瞬の沈黙の後、ひき結んでいた口元をふつと緩めた。

『四属を束ねるそなた、の命だ。 南 の私が断りなく動いたところで、 東 も何も言うまい。 よかろう。 地下の水は私が浄めよう』

『おうや、イーデイがラスターのために動くなんて、どれくらいぶりかね？』

宙に身体を横たえたシリリング、茶化すように問いかけると、イーデイは曖昧な頬笑みを浮かべ、左腕を水平にし、手首を軽くひねるように動かした。手のひらの上には、卵ほどの水玉がくるくると回転しながら淡い光を放っている。

『君や炎帝サイラムが動けば、大抵は事足りているだろう？ だが』

緩慢な動きで、イーデイは手のひらの水玉を天へ押し上げるように放った。

放たれた水玉は、宙に横たわるシリリングの横を矢の如き速度で昇り、直後、天井から大雨が降ってきた。

炎と水がぶつかり、多量の蒸気が室内に満ちたが、なおも激しく降る雨に圧され、蒸気も、炎帝の青白の炎も弱く、小さくなっている。

『私とて、ユーシイス・ディアナを護るため共に在るのだ。要請があれば、否やはなく動くさ。 水 には 水 の役割がある。 そのための労を、惜しむ気はないよ』

眼を細め笑いかけるイーディに、シリンは肩を竦め微笑み返した。視線を、シリンから炎帝サーラムへ移したイーディは、変わらぬ微笑で、青白に輝くサーラムの顔を見つめた。

しばし視線を交わした後、サーラムは姿を消した。その姿が消えるとともに、周囲を照らしていた炎の光も失われた。光が消えると間もなく、イーディの姿も薄れ、闇へ溶けるように消えていった。

『お愛想でもいいから、軽い挨拶を交わすくらいできないものかね？ まあ、慣れ合わないところが奴等らしいのだけど』

苦笑交じりに言うと、シリンはふうつと細い息を手のひらにかけた。すると、小さな光球が掌上に現れた。シリンはそれを放り投げるように宙へ放した。

ラスターはわずかに顎を引くと、光の先に広がる闇へ視線を向けた。

ほぼ降り止んだ雨に濡れたラスターの髪が、新たな光に照らされ鈍い黄金に輝く。

炎と風、そして水に流され薄れていた腐臭が、空間に再び漂い始めている。

目を凝らし見ると、光球の照らす外、ラスター達からやや離れた石壁や床から死魔獣がズルズルと湧き出し、遠巻きに、しかし確実に、ラスターを取り囲み始めていた。

『なんだ。普通の人間ならば、足元が見えず怪我でもしたら気の毒だと思いきを出してやったが、意味はなかったな』

「　　そうでも、ないですよ」

まだ若い男の声が響いた。

「大精霊が作り出す、貴い光で迎えられるなんて、なんたる光栄でしょう」

頭を下げ、落ち着かな気に頭を振り、身体を揺らしウロウロする死魔獣の後方に、蜂蜜色の髪をした青年が立っていた。淡い水色の瞳が、光を捕らえきらきらと輝いている。

「数時間前までは、僕も暗闇で目が見えたんですが、器が変わったら見えなくなつて。だから、光があるのは非常に有り難いんですよ。おかげで、労せずしてあなた方の顔を見ることが出来た」

青年に視線を定めると、ラスターは顔にかかる前髪をかき上げた。

「そうがいし操骸師か」

「そう、呼ばれますね。ふふ、始めまして」

人懐こい、どこか幼さを感じさせる笑顔を青年は見せた。

「？有翼獣を伴う騎士？。ごく一部の術者の間では、噂されていたんですよ、貴方の特徴。先にあの有翼獣は見ていましたけど、よもやキソスへいらしていたとは思いません。だって、獣騎士なんて、多くは無いにしろ他にもいるし、曖昧な特徴以外、年齢も性別も容姿も、実に様々に言われていましたからね。そも、貴方の様な方が、単身で大陸をうろついているなんて、誰が思います？ 本来なら、精霊王殿の奥殿の更に深い場所に閉じ込め、厳重に護られていてもいい秘宝のような存在だ。先程オリィオナ殿に聞かされるまで、この地下にいるあなたの存在に、まるで気付きもしなかった。僕としたことが、不覚をとりましたよ。アラ

スター＝リージェス＝シン＝エラノール。この世で最も貴いとされる、精霊王シラの聖血エラノールの器」

ラスターとシリリングが自分に注目していることに満足を感じているのか、青年は頬を僅かに紅く染め、ずっと笑顔を絶やさない。

「神 エラン が地上を去る際、自らの代わりに残したとされる、神エランに最も近い存在。伝えのままだとしたら、生命を自在に生みだした エラン の分身と言ってもいい。新たな神として、大神殿の主として崇められていてもおかしくないよ。 欲しがらるわけだよ。 貴方という存在は、聖教エルナイ が求めているもの、そのものだよ」

ラスターとの距離は置いたまま、左方向へゆっくりと移動する青年は、大袈裟に手振りを加え、一人愉しそうに語り続ける。語る青年の歩みに合わせ、死魔獣達もゆっくりと移動しながら、こちらはラスターとの距離を僅かずつ狭めている。

「だけど、不思議ですよ。 エラン は五人はいたつていうのだから、伝えの通りなら、聖血の器も最低同じ数、居てもいいと言っことになるのに、どの大神殿にもその存在を明らかにする遺物も伝承も、何一つ残っていないなんて。 唯一例外に、曖昧ながらも存在が語られているのは、アラスター＝リージェス、貴方だけだ。 だけどその貴方も、何処にいるのか所在が知れないというじゃない？ 実際の貴方を知っているのは、恐らくティルナ王と、精霊王殿に仕える上級の神官、巫子のごく一部といった、限られた者達だけでしょう？ そんなだから現在では、神殿関係者ですらも、聖血の器の存在を疑問視するとか、耳にしたこともないという輩までいると聞くけれど、僕は信じていましたよ。 ずっと、ずっと、必ずいるってね」

幾度となく、ふふと嬉しそうに笑うと、青年は一番傍にいた二つ頭を持つ狼の首元を撫でながら、ぱたと歩みを止めた。立ち止まり、改めてラスターへ視線を向けると、頭から足先まで、品定めでもするようじっくりと見た。

「ずっと、貴方に会いたいと思っていましたよ。いや、僕だけじゃないな。大陸中の人間、そう、生ある存在なら何でも、貴方の存在を知れば、貴方を求めるといつてもいい。僕は嬉しいですよ！ 今、それが実現しているんだから。ああ、わかります？ 僕のこの気持ち！」

青年は、明らかに頬を上気させて飛び跳ね、喜びを全身で現している。少し波打った蜂蜜色の金髪が、青年が飛び跳ねる度に揺れ、微妙な光を生む。

『無邪気ぶって見せているがお前、人間としてはそれなりにいい年だろう？ いまのそれは、何体目の器だ？ 替えたばかりだろう？ 器の主は眠っているだけで、まだ死んではおらぬようだが？』

ラスターの頭上で横たわり、頬杖をついて眺めていたシリンが、やや呆れ気味の顔で問いを投げつけた。

シリンの言葉に、青年は飛び跳ねるのを止めくすりりと笑った。

「嫌だなあ。精霊の貴方から見たら、百を幾らか超えたって、まだまだ若造でしょう？ 正確な年齢なんか、とうに忘れちゃいましたけど、僕はまだ若いんですよ？ せっかく、心からの喜びを味わっている時に、水を差すようなこと、言わないで下さいよ」

ラスター達へ向けていた水色の瞳が、ふいに濁った。それが合図のように、死魔獣はいつせいにラスターめがけ床を蹴る。

「貴方は、風の王？ 肌が切り裂けてしまいそうなほど、ビリビリした酷い痛みを感じる。つい先程、地の王にやられた時、もそうだったんですけど、そうやって、ただ居るだけでこの場を支配してしまう強大な圧力を感じる。僕が捕まえて仮魂にする小精霊とはまったく比べ物にならない、本当に、巨大な力だ」

視線を合わさぬようにしつつも、青年はシリンを確認するように見、それから視線をラスターだけに定めた。

「アラスター」リージェス。貴方には精霊の王が従っていると、以前、片言の人語を話す精霊から曖昧に聞いてはいたんだけど、風の王を従えておいでだったんだね？ でも、他で聞いた貴方に付いての伝えでは、？青白い焔を操る？とあった。おまけに、この地下でも青白い炎を見たと言う兵の言葉もあるし、ここにも、大きな火の痕跡がある。？青白の炎？といえば、北の火の王である炎帝の焔だ。ねえ、貴方は本当に炎帝を従えているの？ もしそうだとしたら、なんて素晴らしいんだろう！ 四属の中でもっとも扱いにくい火の、しかも最強と謳うたわれる炎帝を従えるなんて、考えただけで鳥肌が立ってしまうよ！ なんて、なんて凄い！ なんて羨ましいんだろう！！」

『よく、喋るやつだな』

シリンは頬杖を付いたまま、一人興奮している青年を指差し、ふっと軽く息を吹いた。

すると、青年の横にいた双頭の狼の身体が、頭の付け根を境にスウツと左右に裂け、光を散らしながら、ドサリと地に崩れた。

剣を抜いたラスターも、シリんと同時に動き始めていた。

天井は高く広さもそこそこあったので、剣を振り動くことに不自由はなかった。

四方から攻めてくる死魔獣を、シリンが起こす風に乗るように、上下左右、自在に流れ動き、かわし、間を詰めては死魔獣の首を次々と斬り落としていく。

死魔獣が倒れる度、その身体から淡い光が離れ闇へ溶けていった。次々と死魔獣を切り裂き倒していく二人の姿に、青年はしばし呆然とし、そして唐突に、それまでにない大声で笑い始めた。

笑うだけ笑うと、青年は大きなため息を吐き壁にもたれかかった。

「ああ、やはり桁が違いすぎる。残っている中では、結構強いのを揃えて来たつもりだったけど、比較にならないな。それに、この身体、僕には相性が悪い。死体じゃないから馴染み難いし、妙に疲れてしまう。せめて、あの少年の身体が手に入っていたら、もう少し自由に動けたかもしれないのにな」

力を使い果たしたのか、肩で息をしている青年の胸座むなぐらをラスターは無造作に掴み壁に押さえ込んだ。青年は少しの抵抗も見せず、半分閉じかけた瞳でラスターの青の瞳を見た。

「ねえ、知っています？ 金の瞳の少年。黒髪だけれど、あれは真正正銘のオスティルの瞳。エランか、それに近い古の民しか持たないといわれる神の瞳。あの少年は、古の民の血を非常に濃く受け継いでいる。僕の見立て違いでなければ、<sup>ラール</sup>聖血の器である貴方と変わらない程に、濃い血を、ね。ねえ、貴方。あの少年を、貴方は知っているのではない？」

自分を押さえつけるラスターの腕に手をかけ、青年は薄く笑いながら、自分の言葉に対する反応を待った。しかし、いくら待って

もなんの言葉も反応も返ってはこない。

青年は瞳を閉じ、肩をゆすり笑い出した。

「無回答ですか。でも、僕は貴方とあの少年に同じものを感じるんですよ。長年、闇の中にいるとね、光に対して憧憬の様なものを抱くんです。闇に慣れた存在には、強い光は、眼や肌を突き刺し破るような痛みを与えますからね、非常におぞましいものなんです。どうしてか、懐かしくもあるんですよ。実に複雑な感情。

それを遠ざけたくもあり、手にしたくもある。何としても手に入れ、飽くことなく眺め、至宝の玉の如く、優しく包み込むように撫ぜ、磨きをかけ、じわりじわりと抱きしめる手に腕に力を込めきつと最後には、見る影もないほど滅茶苦茶に引き裂き、壊してしまいたくなる。貴方へもあの少年へも、そういった、同じ様な感情を覚えるんですよ」

やはり反応の無いラスターの顔を見て、青年はにたりと笑う。

「ああ、でもあの子は半分 喰われ人 になっっているから、僕と同じ闇の住人になる可能性が高いかな？ 今、思い当たったんだけど、貴方が追い続けているウルド 御方 が南方で喰い損ねた人間って、ひよっとしてあの少年じゃないのかな？ 貴方は、その現場にいたんじゃない？」

青年は一回深く息を吐き出すと、ラスターの瞳の奥を覗くように見た。

「知っているんでしょう？ シン・エルナイ 聖神聖教 が 新しき主 となるものを造ろうとしていること。僕は、それが、無事誕生出来るよう手助けをするためだけに雇われたようなものだからね、聖教の深い事情ってものはあまり知らない。おまけに、僕はまだ直接

御方 に会ってないから、確かなことは判らないけれど、恐らくあの少年は、器 候補の娘以上に、御方 の器 に相応しいと僕には思えた。しっかりと視られなかったし、まだ磨かれてもないから断言はできないけど、あの少年は見た目のままのひ弱な子供じゃない。今の時点では、本人が？自分？を、知っている様子はなかったけど 化けるよ、きつと。 ねえ、あの少年はいったい何？ いったい、どんなもの、なのかな？」

ラスターは青年を、やや持ち上げるようにして壁から離すと、一呼吸の後、叩きつける勢いで再び壁に押さえつけた。

強かに背を打ちつけられた青年は、瞬間、呼吸が出来なくなり顔を赤らめ苦しみの表情を見せたが、少しすると、引きつるような短い呼吸と咳の様なものを繰り返した。 苦しむ青年の様子を目にしても、ラスターは腕の力を緩めず押さえ続けたが、それ以上締めつけることもしなかった。

『生殺しは、あまり良い趣味じゃないぞ？』

ラスターの肩に手を添え青年の様子を見ていたシリンは、青年の前髪を掴み顔を上げさせた。

『この人間の子は、水 と縁があるようだな。 十七くらいにはなるだろうに、随分と穢れが少ない。 上手く育てれば、いい水の守 になっただろうかな』

どうでもいいといった口調のシリンの言葉に反応し、ようやく呼吸が整い始めた青年は、くくつと短い笑いを漏らす。

「過去形ですか？ 僕が乗っ取っているだけで、風の王、貴方が言われた通りこの青年はまだ、死んでないんですよ？ 僕が他に

移れば、この青年はこの青年の一生を生きる望みがまだあるのに。

生きているのに消そうっていうんですか？ 酷いなあ。 あ

あ、でもアラスター・リージェス。 貴方は先程どんな方法でだか知りませんが、キサ殿を殺したんですね？ 地下から彼女の気配が突然消えたのは貴方のせいでしょう？ オナ殿が、キサ殿は消える直前貴方と対峙していたのだと、逃れ戻った者から聞いた、と」

水色の目を細め、青年は挑発するように嗤うと、口の中で短い詞<sup>ことば</sup>を唱えた。

石を搔く爪の音が聞こえた。

床を蹴る硬い音がしたかと思うや、黄金の獣がアラスターの腕に喰らいつこうとした。

獣の顔には驚の様な嘴があり、背には、片方を欠いているが翼がある。

寸でで、喰いつこうとする嘴をかわしたアラスターは後ろへ跳び退ると、納めていた剣を再び抜いた。

自由になった青年は、すかさず死魔獣達の間に分身の身を滑り込ませると、胸元を押さえながら歪んだ暗い笑みを浮かべた。

「久しぶりの対面でしょう？ 貴方の聖獣、グリフィス。 色々な獣を見てきたけれど、こんな完璧な聖獣は始めて見た。 せっかくの姿をオナ殿がこんなにしちゃったけれど、それでも、綺麗だよなあ」

額の第三眼と左の翼を失ったガーランの身体は、巨大な山犬程の大きさに膨れ上がっていた。

涎を垂らしながら、落ち付かな気に右へ左へと身体を揺らし、明るい緑の双眸は開かれてはいるが、薄い膜を張ったように精彩がなく、どこを見ているのか焦点は曖昧だった。

それ故か、目の前にいるのが己の主人だとまったく察していない

ようだった。

頭を低く下げ、残った右の翼を開き、喉の奥から長い低い唸り声を発し続けている。

「本物の聖獣って強いよね。相当量の血を絞り取られたっていうのに、まだ死なないんだよ。キサ殿が、これにはまだ使い道があるって言うから、今まで殺さず生かされていたんだけど、そのキサ殿が貴方に殺されちゃったみたいだからね、僕の自由にしていいって、さつき譲り受けたんだ」

新しい玩具をもらった子供のように、青年は無邪気な笑顔を見せる。

「殺してから死獣として操ろうかと思っただけど、どうせなら、貴方と感動の対面をさせてやるうと思っただけだよ。無理みたいだったね？ でも、目覚めた後大変だったんだよ。相当弱っているはずなのにこんなに巨大化して、手近にいる人間に襲いかかってさ。何人が死んじゃったよ、喰いちぎられ、爪に切り裂かれたりだね」

胸の前で手を軽く組むと、青年は瞳を伏せ、死者を悼む詞をさらりと流すように言った。

「でもさ、強めの薬と術をかけてなんとか、ここまで僕の言うとおりに動くようになった。だけど、まだ十分じゃあないんだ。ほら、今だって貴方に飛びかかるのを躊躇っている。僕は貴方を？殺せ？って命じているのに。ねえ、この有翼獣、貴方には従順なんでしょう？ どうやったたら思うように動くかな？ やっぱ、死んでから仮魂を入れるのが一番、かな？」

僅かに頬を上気させている、一見おつとりと優しげな青年の姿と、唸りを上げ続けるガーランを見比べたシリンは、げんなりとした表情になっていた。

『かろうじて、死んではおらぬが、このままでは同じことだな』

ラストーは無言のまま、剣先をガーランへ向けた。

剣先の動きに挑発されたように、ガーランは喚き鳴きたてると、首から肩の毛を逆立て、床を蹴った。

黒く太い爪がラストーの肉を裂こうと伸びてきたが、ラストーは半身を捻りかわすと、手首を返し、斬り上げる第一刀でガーランの胸元から首を深く斬り裂き、続けざま下ろす第二刀でその首を斬り落とした。

切り口から血がどつと噴き出しラストーの半身を紅に染めた。

頭を落とされ、どつと石床に落ちた胴体は、ビクビクと痙攣けいれんを繰り返していたが、次第にその動きは小さくなっていく。その間にシリンは、青年を取り囲んでいた死魔獣を風で切り裂いた。

動かぬものになっていくガーランには目もくれず、ラストーは、一連の光景を凝視していた青年へすつと剣先を向ける。

剣先の鈍い輝きに視線を止めた青年は、銀の刃にぬるりと付く紅い血を見て、場違いに愉快そうな笑顔を浮かべた。

「僕も、他人から？残酷だ？とか？人でなし？とかよく言われるんだけど、貴方も、言われるんじゃない？キサ殿と貴方とは、どんな因縁があったかは知らないから消してしまったことも別に驚きはないけれど、この有翼獣は、ちょっと意外だったな。もう少し躊躇ためらうかと思つたのに、こんなにあっさりと殺しちゃうんだ。獣騎士にとって、聖獣は自分の大切な半身だつていわれるのに。随分長い間、一緒にいたんでしょ？」

青年の問いに、ラスターは僅かに冷めた笑みを見せた。

「ふふ。もしかしたら貴方とは、気が合うのかもしれないな。だけど今、ここで楽しくおしゃべりをする時間はないんだ。僕の役割は十分果たしたし、まだ、死にたくはないからね」

青年が右腕を水平に上げると、床から山犬や大蜥蜴、牛頭猪体といった、虚ろな赤眼の死魔獣が新たに数頭現れた。それらと入れ替わるように、青年の姿は背後の闇に溶け込み、身体と闇の堺が曖昧にぼやけていく。

『どう、するんだ？』

新たに現れた死魔獣を切り裂いたシリリングが、髪を緩やかになびかせながら、少し面白くなさそうに訊ねた。

その言葉に答えることはせず、ラスターは腰にあった短剣を抜くと、闇に溶けかけた青年へ迷いなく投げた。闇を裂き飛んだ銀刀は、青年の左肩に突き立った。

短い呻きを上げ床に肩膝をついた青年の姿は、ぼんやりと透けることない、確かな肉体を持っていた。

「疵きずのついた器は、置いて行くがいい」

短剣を投げたラスターの右手からは、陽炎のような白炎が立ち上がっている。

鮮血に肩を染め、身体を屈めていた青年の口からは荒い息に交じり笑いが漏れている。

「酷い……ことするなあ。傷を負えば、私も、この青年も、痛いんだよ？　でも、僕を行かせるんだ？　ああ、使えるものは使

うだけ、ってことかな？　　ふふ、いいよ。　　貴方のことはちゃんと伝えるし、この器も捨てて行くよ。　　これは僕には、使い難いだけだからね……」

がくりと、青年の身体が崩れると共に、青年の傍で、シリんに片足を斬り落とされ倒れていた一角の獣がのそりと起き上がり、眼に陰鬱な赤の光を灯した。

何かを語るように低く数回唸った後、一角の獣は闇へ溶けるように消えていった。

『ここで、あの操骸師を殺したところで何も変わりませぬが、お前の養い子に無駄な、よからぬ影響が残るぞ』

言いながら、シリンは地に転がっているガーランの屍骸に視線を移した。

『これはまだ、間に合うのじゃないか？』

ガーランの胴体に手をかざし、シリンは横目でラスターを見た。ラスターは床に倒れている青年から短剣を抜き取り、創口に自分の血を一滴垂らすと、布をあてがい縛った。

『やれやれ』

シリンは軽く肩をすくめると、両手を合わせ、ふっと息をかけ広げた。

広げられた手のひらの上には、幼児の頭ほどの淡黄の光の球体が浮かんでいた。

地の上に転がる有翼獣の上に、シリンはそっと球を落とした。

光球はガーランに触れるとふわっと広がり、バラバラになった頭部

と胴体を抱え込むように包み込みこむと、くるくると回転しながら、手のひらに収まるほどの大きさに収縮していった。

小さくなった光球を手のひらに載せると、シリンは再びふっと息をかけ胸元へ仕舞った。

「何を？」

青年の手当てを済ませたラスターは立ち上がり、宙で伸びをして  
いるシリンを、やや険しい目付きで見上げた。

『気にするな。 そういうお前こそ、何をしている？ その青年は  
どうするつもりかね？ あの場面で、お前が消さなかったことも驚  
きだったが、取り憑いた操骸師を追い出し、わざわざ丁寧に傷の手  
当てまでするなんぞ、いつたい、どういう風の吹き回しだい？』

シリンの問いには答えず、ラスターは左腕の甲を押さえ、 東  
の 地の王 ティ・ディ・ダ ンの《名》を唱えた。

『 東 の御老体 』

シリンは軽く居住まいを正し、ラスターも心持ち姿勢を改めた。

《名》を口にした一呼吸後、ラスターの全身が薄い光を放ち、地  
下の空気が震えるように振動を始めた。 地のあちらこちらから淡  
い光が沸き出し、こびり付くように残っていた地の淀みが瞬く間に  
散らされ消えていく。

『 わしを、表に呼びだすとは珍しいのう、アラスター。 どう  
したね？ 何か、困りごとがあったのかね？』

小さな、幼児ほどの背丈の老人がラスターの眼の前にふわりと姿

を現した。

長い眉毛に隠れ瞳は見えないが、その身を包む空気は暖かく、長く伸びた白髭や頭髮が、言葉を発する度にふわふわと揺れる。

好好爺いっしやといった風体の老精霊は、ラスターへ接する時、祖父が孫へ接する様に穏やかに、問いかけるように言葉をかける。

「お呼び立てして申し訳ございません。 ティダ。 貴方への願いがございます」

東の 地の王 であるティダは、このキソスを含めた東の 地の精霊の長である。

現在、ティダは 地 の 四王 の代表として、ラスターを護る護楯 になり、その身の内に宿り常に行動を共にしている。

ティダは、北の 火の王 炎帝サーラムや西の 風の王 シリンのように、ラスターを目に見える形で護ることはしないが、他の四属の 王 よりも強く、ラスターの身体 器 を護っていた。

ティダは、全精霊の中でもっとも古くから存在し、 火 水

風 地 の属性を超え、全ての精霊から畏敬される大精霊である。 何者へ対しても態度を変えないシリンでさえ、ティダに対しては多少改まった態度で接する。

ラスターにしても、ティダには特別の敬意と信頼を寄せているため、自然、他の 四王 に接する時より言動が丁寧になる。

軽く頭を下げた後、天青の瞳を真っ直ぐに向けてきたラスターへ、ティダは軽く頷いてみせると、「言ってごらんな」と、柔らかに促した。

眉に隠れたティダの目を見ながら、ラスターは口を開いた。

南の 水の王 イーディに依頼したように、ティダへも、今さらと思えるキソスの地の浄化をラスターは願ったのである。

その願いを聴き、ティダはしばし沈黙した

『わしがそなたから離れば、そなたの身体の護りは弱くなる。それは承知だね？』

地 は護りの力が強い。

殊に、ティダ程の大精霊の護りとなると、僅かの隙もなくなってくる。

目には見えない、被膜のような 地 の護りに包まれた庇護される者は、その身が秘め持つ力を、被膜の内に閉じ込められているため、魔物や古の精霊といった 闇に棲むもの に存在を覚られ難くなる。被膜は、庇護する者の存在を隠すだけでなく、万一、近づく邪な存在があつたとしても、それらを跳ね返し砕く力もあるとされる。

護られる身としては、非常に心強い。

しかし、意図的に魔物等を引き寄せたい場合、その強い護りが妨げともなる。

ウルドは、ラスターに四属の 王 が随行し、その血肉を護っていることを経験で知っている。

当然、不用意に近付けば、己の身に危険が及ぶことを覚っている。故にウルドは、ラスターの執拗な追跡を、紙一重であれ逃れ、接近することを避け続けている。

だが、今のウルドは、多少の危険を冒してでも、新しい 器 へ移ることを望んでいる。

魔物と言えど、長い歳月の内にその 器 である肉体は老い、衰えていく。

ウルドの 器 は、既に衰え始めていた。

器 の衰えは、魔力と呼ばれる力にも僅かずつ影響を与える。

その力が弱り消え果てる前に、新たな 器 へ、己を丸ごと移植しなければ、いずれはただの生物と同じように、死ぬ。

それを避けるため、ウルドはオレンで、新しい器となる力をを見つけ、選んだ。

そして、移植の術を行っていた最中を、ラスターに急襲された。大きな力 術を行使する時、術者（魔物）は、術を施す対象へ意識の大半を集中させる。

術の規模が大きければ大きい程、長い時間の、高い集中が必要となり、術とは関わりない周囲への注意が薄くなってしまふ。そこに、僅かな隙が生まれる。己に近づくものの察知に遅れが生じる。ラスターはその隙を利用した。

ウルドは両腕を切り落とされ、多量の血と力を失い、一時は半死に近い状態へまで追い込まれた。

力の強い魔物は、蜥蜴が切れた尻尾を再生するように、欠落した己の身体を再生させる能力にも優れているが、衰えの兆しが見えていたウルドには、もう、かつてのような強い再生力はなかった。

このまま新しい器へ移れなければ、遠くない将来、現在のウルドの器は腐り、動けぬようになり、最終的には死を迎える。

三魂を持ち、いつかは生まれ変わるとされる人間などと違い、一度死ねば、魔物に次の生はない。

じわじわと迫りつつある死を前にしたウルドは、目の前に餌を吊るせば、涎を垂らし喰らい付きたいほど焦っているはずだ。

ウルドが人間を憎しみに近いほどに嫌い、必要のない限り、自身からの接触を避けていることをラスターは知っている。

そのウルドが、人間の集団である 聖神聖教 内に身を潜め、その手を借りてまで新しい器を得ようとしていることで、その焦りの程は読み取れる。

聖教は、ウルドの新たな器としてアルフィナを選んだ。ただし、アルフィナの身体が真にウルドの器に相応しいかは、移ってみなければわからない。

現時点で、何よりも確実なのはラスターの身体を奪うこと。もしくは、聖血の器の能力として語り伝えられている力を用い、

全く新しいウルドの 器 を、ラスターに造らせることである。  
ウルドは、己の持つ力を何一つ失わず移すことができる 器 を  
求めている。

そして、ラスターには、その期待に応えるだけの能力が、多様な  
意味で備わっている。 いずれの手段を選ぶにしても、ウルドも  
聖教 も、一も二もなくラスターを 器 候補として選ぶだろう。  
だがその実現のためには、ラスターの協力ないしは死が必要とな  
る。

そして、そのためにはどれ程の時間がかかるかも、それなりには  
承知しているだろう。

しかしここで、ウルド自身選んだ 器 であるカラが現れたと知  
れば、ウルドは 聖血ラスターの器 のことなど忘れ、何が何でもカラを捕  
らえに動く。 多少の無理をしてでも、オ レンで喰い残したカラ  
の《名》と《影》を喰らい尽くし、完全な 器 として完成させよ  
うとするだろう。

ティダは、眠ってでもいるかのように俯き、しばらくこくりこく  
りと上半身を揺らしていたが、最後に一回大きく船を漕ぐと、ゆっ  
くりと顔を上げ、ラスターの顔へ髭もじゃの顔を向けた。

『 何者にもその血肉を渡さぬこと。 これがわしら四属の務め。  
四属は、アラスター・ユーシイス・ディアナ「リージエス」シン  
「エラノール、そなたを護る。 そなたは、如何なる存在にも決し  
て与せず、その身、何処に在りても、ひたすら 聖血エラノールの器 として、  
精霊王シ ラの 聖血 を護る 器 として、存在し続ける 。  
全ての条件を受け入れ、四属と盟約を交わし、儀礼を通過したこ  
とで、そなたはそなたの意思を持ったまま、精霊王殿 テイルナ  
から出ることを許された。 これらの経緯、忘れてはいないね』

「忘れはいたしませぬ」

簡潔に、淀みなく言うラスターの頭へ手を伸ばすと、ティダは子供を褒めるように、金の頭髪を数回撫でた。

『その器と聖血を護るに影響があると判じられた場合、わしらはそなたを封じ、ティルナへ連れ戻すこととなる。これも、解っているね』

「この器も血も、我がものでないことを承知した上での、願っています」

ティダは僅かに身体を下げ、ラスターの瞳を真正面から覗き込んだ。その意志の固いことを知ると、更に数回頭を撫でた。

『アラスター。そなたに負わされたもの、忘れさせてやりたいが出来ぬ爺を赦しておくれな。だが、此度の願いは聞いてあげよう。西の風の王 シリン。そなたさんも、聞いたかね？』

ラスターの少し後方に立っていたシリンは、濃青の瞳を細め無言で頷いた。

『そなたの騎士としての技量もなかなかのものだろうが、くれぐれも、無茶はするんじゃないよ。まあ、シリンとサーラムが共におれば、万が一も、大傷を負うことはなかるうがの』

この言葉に、シリンはにっこりと微笑み、宙に身体を浮かせるや、ラスターの肩に手を回し顎を置いた。

『その点は保証が出来ますよ、御老体。私もだけれど、炎帝とこの者は、相性が良すぎるくらいに息がぴったりですからね。いざ』

となればイーディも傍観はしないでしようから、こっちは、まあご安心下さいな』

シリンの言葉に、髭を揺らしながら頷いたティダは、ふわりと地へ下りると、ちょこちょことした歩みで、ラスターが傷の手当てをした青年の傍へ寄った。

『ではわしは浄め方々、この人間の子でも手土産に、イリスミルトといったかな？ あの者の旅籠へ行くとするかな。南 のカナルが、わしの代わりにあらかた浄めてくれたようだから、礼を述べんとな。南 の憎まれ口を直接聴くのも、久方ぶりに楽しかるうて』

ティダの言葉に、シリンは素直に笑ったが、ラスターは曖昧な表情のままだった。

『南 の相方は、そなたの友であったな。何か、伝えることがあつたら言つてごらん。手伝いに来てもらいたいのなら、そう伝えよう。南 は喧嘩好きだからね、相方の襟首掴んで加勢に来るだろうよ。希望があれば、言つてごらん』

意識のない青年の肩傷あたりを摩りながら、ティダはラスターの青白い顔を見上げた。

「いえ」

ラスターの短い答えに「ふむ」とだけ言つと、ティダと青年の身体は、瞬きする間もなく消えた。

ティダが現れた僅かの間に、地下の淀んだ気は、驚くほど清浄な澄んだものへと変化していた。

『これでいけばキソスの地の汚れは、間もなく失せるだろうよ。カナルの下準備も大きいだろうが、さすが東の御老体。あんな小さくしわ枯れたようでも、違うね』

凝った身体を思い切り伸ばすように、シリンは握った手を天へうんと伸ばした。

『しかし、東の御老体に人間の子を運ばせるとは、凄いとさせるなあ。こんなことをティダ殿にさせられるのは、シラとお前くらいだろうよ』

血の付いた短剣を衣の裾で拭っているラスターを見下ろし、シリンはくすくすと笑った。

『それにしてもお前、本当に可愛げがないね』

一人で愉快がっているシリンへ、ラスターは視線だけを向けた。

『旅籠へ行けばあの子供、がいるよな？　ま、面倒見の良い御老体のことだ。言わずもがなだろうがね』

シリンの言葉を無視すると、ラスターは短剣で指先に傷をつけ、滲みでた血を額に付けた。

「リーデイル・エアル・シルフィデイル・フォリン。　聖血の香が地下中　キソスの隅々まで届くよう、風を」

ラスターの横顔を見、シリンはにやりと笑った。

『承知した』

空気が大きく緩やかな渦を巻き、内から、湧きあがるような風が生まれる。

> i 2 6 5 1 1 | 2 4 0 <

## 第5話：再始動へ

### 5：再始動へ

深夜、カラはアルフィナの部屋を訪れた。

凍えた空気が廊下を満たしていたが、扉の内はほんわりと暖かく、中に入ると少しほっと出来た。

戸外は漆の様な濃い闇に包まれている。

室内も、小さなランプが小卓に置かれているだけで、薄暗い。

そつと、アルフィナの枕元に近付くと、アルが間違はなく息をしていることを確かめる。　小さな寝息が聞こえると、カラはほっと息を吐いた。

白銀の長い髪は、左右でゆるく編まれている。

この白い姿を見慣れはしたものの、カラの頭の中のアルは、黒髪の、表情をよく変える澁刺はつらいとしたものだ。

「アル」

聞こえるか聞こえないかの小さな声で、名を呼んでみる。

夕食時のことだった。

イリスより、夕鐘の鳴った少し後にアルが目を覚ましたと聞かされた。　目覚めてすぐは、多少記憶の混乱があったものの、しばらくすると、落ち着いた会話が出来るようになった、と。

自由に動けるようになるには、まだ少し時間が要るだろうが、もう心配はないだろうと伝えられ、食後に一緒に会いに行くか、と尋ねられた。

だが、カラはその誘いを断った。

寝込む前の、地下でのアルの視線が忘れられなかった。　得体の

知らない化物を見るような、怖れを含んだ眼差し。

キソスに来るまで何度も、そのような視線に曝されてきた。すっかり慣れたはずの視線だったのに、アルから同じものを向けられた時に感じた痛みは、自分でも理解できない、ひどく辛いものだった。

また、あの目で見られるのが怖い。

イリスと一緒にいれば、アルも地下でのように怯えることはないだろうと思う。それでも、アルの黒の瞳に、あの揺らめきが再び浮かぶかもしれないと思うと、目覚めているアルとの対面を躊躇せずにはいらなかった。

夜もすっかり更けたこの時間、イリスも既に眠りについている。もし見つかつたところで、見舞いに来たこと自体を咎められることはないだろう。

だが、やましさが心から離れない。

『面倒なガキよなあ。誘われた時には断っておきながら、こんな時刻に夜陰に紛れ見舞いなぞ、夜這いでもあるまいに』

カラの肩で、大欠伸をしながらナジャがぼやく。ぼやきながら、いつものように硬い尻尾でカラの背中を叩き続ける。

「静かに ……っ」

ナジャに文句を言いかけて慌てて両手で口を塞ぐ。ナジャに向けていた視線をおそろおそろアルの寝顔に戻してみたが、聞こえなかったとみえ、アルは変わらずに寝ている。

「もう、静かにしてよ！ 無理に付いて来なくていいって言ったろ。文句言っくらいなら」

『? 帰れ? と言うつもりだろうが、不安がありありと顔に出ておるぞ』

緑の瞳をくるりと回転させると、ナジヤはしししと笑った。がつんと言い返したいところだが、ナジヤの指摘も事実なので、顔を背けるに止めた。

「と、とにかくつ、肩でぐちゃぐちゃ言わないでよ、重いんだから」

小声で文句を言いながら、カラは昼間ナハから受け取った、短いままの棍こんを腰から抜き取った。

棍の表面には、カラには読めない神聖文字が彫られている。ナハの話では、これらの文字にはとても強い護りの力があるのだという。

カラは棍の先をアルの額の上に、触れないようにそつとかざした。

『お前、本気で阿呆だな。それはあくまで護身の棒つきれだ。』

医術道具でもなければ呪術の道具でもない。そんなことをして何の意味がある?』

薄暗い室内でも明るく輝く緑の瞳をクルクルと動かしながら、ナジヤは熱い鼻息をカラの頬に吹きかける。

ナジヤの嫌味には応じず、いたって真剣にアルを見つめながら、回復を願う言葉を心の中で唱えた。

しばらく同じ姿勢で願い続けると、カラはふうと深く息を吐き、自然な姿勢に戻った。

じつと、観察でもするようにアルの寝顔を見てみたが、あまり変化はなさそうだった。

少し肩を落とし、カラは寝台から離れると棍を腰に戻した。棍の横では、短剣のオスティルが、淡い金の光を揺らめかせている。

一寸の躊躇いの後、カラはアルフィナの頬に指先を触れ、その体温を確かめると、眠るアルの姿を最後まで目にしながら部屋を出た。

大丈夫。 アルは大丈夫。

心の内で、自分に言い聞かせるように繰り返した。

日中、カラの不安を掻き立てる小さな異変があった。

それはナハと話し終え、部屋へ戻った直後のことだった。 机の上に置いていた羽根に変化が起こった。

アルと旧宝物庫に忍び込んだ時拾っていた黄金の ナジャが、ガーランのものと言ったあの羽根が、突然光を放ち、白く、燃えるように輝いたかと思うと、急速に色褪せ、死んだように静かになった。

ナハにどういふことを訊ねようとしたが、折り悪くナハは旅籠を出てしまっていた。 慌ててイリスを捉まえ訊ねたが、イリスは少し考えた後、「調べてみましょうね」と言うに止まった。

ガーランに、何か良くないことが起こったのではないかと、良くない考えばかりが膨らんだ。 一つの不安の成長は、他の アルの体調が悪化するのではないかと といった不安にまで影響を及ぼしかけたが、夕食時のイリスの報せと、今、自分自身で確かめたことで、アルに関する不安はかなり軽くなった。

ふう、と深く息を吐き出すと、しんと冷えた暗い廊下の先へ視線を向け、次の目的地へ歩み始めた。

『小娘で効果がないのを見確かめておきながら、まだやるか。 時間無駄だな』

「今は寝てるからわかんなかったけど、明日目を覚ましたら、ずっとごく元気になってるかも知れないじゃ ……」

小声でナジャに反論をしていると、ふいに、足下からふわりと暖かな気が満ち、周囲の空気がゆらと揺れたように感じた。壁に遮られ見えはしないが、庭の木々がさわさわと揺れているのを感じる。

「ねえ、ナジャ。なんか今、変じゃなかった？」

ナジャは興味なさそうに大欠伸をすると、「行くならばさっさと歩け」と言った。

肩の上にどっしりと乗り、偉そうに命令するナジャにかちんときながらも、不思議な感覚も一瞬で過ぎ去ったので、カラもそれ以上は気にしなかった。

アルの部屋に入った時と同じように、カラはなるべくそっと、必要な幅だけ扉を開き身体を滑り込ませると、静かに扉を閉じた。

アルの部屋よりややひんやりとしたレセルの部屋の灯りは、全て消されていた。

街灯の少し遠い光が、硝子窓から僅かに覗き見えるが、室内は、普通の人間ならば動くことを戸惑わせるほど暗い。

金の瞳は自分に不利に働くことが多いが、こんな時には便利なのだとカラは思う。

どんな暗闇の中でも、カラの瞳はものが見える。気のせいか、今は以前よりもはつきりと、鮮明にものが見えるようになっていた。暗い室内の左奥に寝台があり、レセルはその上に休んでいる。

足音を忍ばせ、寝台へそっと近づく。肩でわざとらしいため息を吐くナジャを無視し、カラはアルにしたのと同じことを、レセルに行おうとした。

しかし、棍をかざそうとした瞬間、手首を掴まれた。「ひつ」と小さな悲鳴を上げ、カラは棍をレセルの上に落とした。

「何を、している」

少し擦れた低音が、問いながらカラの手首を捻り、身体を寝台の上に押さえ込んだ。意識なく眠っていると思いついていたレセルが、左手で自分の上半身を支え起き上がっている。

予想外の出来事に驚き、とっさに、カラは自分を掴む手を振り払おうともがいた。

ほんの僅かの動きだった。

だが、レセルの身体は抗ったカラの動きに引きずられ、寝台から軽く持ち上がった後、振り落とされるように床へ落ちた。普段なら何ともないことだろうが、傷を負ったレセルには落下の衝撃が堪えたのだろう、カラから手を外すと、上半身を屈め苦痛に耐える様子を見せた。

カラはさつと青ざめた。

慌てて床に膝をつき、レセルの顔を覗き込もうとすると、腹部に黒い染みが滲んでいることに気付いた。

「ご、ご、ごめんなさいっ。 オレ、力の加減忘れて 。 お腹、怪我してるのに、ど、どうしよう、血が ……」

腕に手をかけ、顔を覗きこもうとするカラを、レセルは拒絶するように突き放した。

「何を……していた」

肩で息をしながら、レセルはカラを見据えた。 括られていない、伸びた髪に見え隠れする黒の瞳は鋭く、険しい。

アルの父親だと言う男。 確かに、この黒の瞳はアルと同じ色だ。

「ま、まだ目が覚めないってイリスさんから聞いていたから、気になつて。 その、地下でオレ、見てたから、だから……」

カラの言葉を聞いて、レセルは考えるように目を細める。

「……イリス？　ここは、イリスミルトの旅籠か……」

「あ、うん。　ナ八さんがオレ達と一緒に運んでくれたんだ。　イリスさんがずっと見てくれてたんだ。　心配してたんだよ、とつても」

「だからといって、こんな夜更けに、お前が来る理由にはなるまい？」

「そ、そうだけど、でも、アルとオレを助けてくれたし。　オレ、あの　オレ、アルの友達なんだ。　だから……」

傷が痛むのか、レセルは唇を引き結び、眉間にしわを寄せた。動いたためか、レセルの腹部の染みは更に広がっている。

「ち、血が。　ど、どうしよう、血、止めないと」

どうしてよいか分からず、青ざめおろおろとしているカラの後頭部を、ナジャの尻尾が打った。

『まったく、学習せん小僧だな。　地下で小娘へしたようにすればよかるうが。　ついでに、毒が抜けてしまつよう願ってやればいい』

はっとして、カラは無理矢理レセルの腹に手を触れ息を吹きかけると、重ねた手に額を当て、血が止まるように念じた。

最初は拒もうとしていたレセルだが、少しすると抵抗の様子を見せなくなり、カラのするがままにさせた。

長い沈黙が続いた後、レセルの手がカラの肩に置かれた。

「もう、いい」

レセルの言葉で身体を起こそうとして、カラは眩暈を覚え倒れそうになった。その身体を、レセルの手が支えてくれた。

「あ、あの、傷は……？」

ぺたりと床に座り込んだカラは、少しぼんやりする頭を一振りしてから、レセルの顔を見上げた。

「問題ない」

暗い表情に変わりはなかったが、その声には幾分力が戻ったように感じられた。

少し不安げに見上げるカラの金の瞳を見返しながら、レセルは屈めていた背をゆっくりと伸ばし、カラと向かい合うよう座り直した。

「名は？」

ほんと、投げるように問われ、カラは一瞬なんのことも分らなかつたが、慌ててペンダントを引き出し側面をなぞると、自分の名をぼつんと口にした。

「レセル　さんていうんでしょう？　アルのお父さん、なんでしよっ？」

「だから、何だ？」

「だから、えつと……アイルーナさんがあんたのこと、いい人だつて言つてたんだ。アルもお父さんのこと大好きなんだつて。だけど話す時間がないから、口には出さないけど、本当は寂しがつてるんだつて。だから、もしあんたが死んじゃったりしたりしたら……」

レセルの顔付きが僅かに変化した。

「何の 誰の話を、している？」

レセルの険しい視線に気圧されつつ、カラはペンダントを握りしめ、視線をそらさず、むしろ負けじと睨みつけるようにした。

「オレ会つたんだ。地下で、アルの魂を探している時。白銀の長い髪に薄い緑色の瞳の、すごく優しそうな女の人。神殿にある神像みたいに綺麗な人だった。アルにも似てたよ。オレ、なかなかアルの居場所を見つけれないで、よくわかんない場所であつてたんだ。そうしたら、その人が励ましてくれて、ちょっとだけ、アルのこと、話してくれた。その時、あんたのことも少しだけだけど、聞いた。あと、イリスさんからも、少しだけ。ラストーとも知り合いなんだつて」

必死で語るカラに合わせるように、腰のオスティルの光も強くなる。そんな様子を黙って見ていたレセルは、ふつと息を吐き出すと、カラから視線を外した。

「ならば、もういいだろう。それよりお前は、自分が何者か親のこと、郷里については、どれ程覚え知っている？」

「おぼえしる？ どれ程つて、オレ、親の顔も名前も知らないし、

何処で生まれたかも知らない」

一瞬キョトンとした後、カラは言い慣れた自分の身の上を口にしたが、ふっと何かが引っかかり、慌てて言葉を継いだ。

「で、でもっ、育ててくれた尼僧様が、きっと色んな事情があつたから親はオレを捨てたんだって。このペンダントと一緒に置かれてたんだから、ただ嫌いで捨てたわけじゃないって。これに《名》が彫つてあつたんだ。すごくいい《名》だって、尼僧様が褒めてくれたんだ。それも半分、失くしちゃったけど……」

レセルは少し離れた場に落ちていた棍を手取る。

見た目の細さ短さとは釣り合わない、ずしりとした重量に驚きを覚えたが、表面に刻まれた神聖文字を目にするや、驚きは顔にもはつきり表れた。

「この棍はお前のか？」

「うん。昼間ナ八さんからもらったんだ。ラスターが作ってくれてたんだって。その神聖文字が護符代わりにもなるから、いつも持っておいた方がいいって」

神聖文字と一言で行つても、時代や地域により若干ずつ異なる文字が用いられていたため、大陸全土では、その種類は知られているだけで十数種はある。

レセルは神殿へ仕えたこともある元騎士で、大半の神聖文字は読めるようになっていた。

その文字の種類によって、持つ効力に違いがあること、その文字を記した者の能力によって、示す威力が違つことも知っている。

我に触れられるは 我に許されたものなり  
我を手にするもの 金剛の躰をもち  
如何なるものも 瑕つけることは能わず

あまり見たことのない、かなり古い神聖文字のようで、詳細に読み解くことは出来なかったが、大凡このような内容が、深赤の棍の表面に金で象嵌されている。

これらの文字は、相当強い力の持ち主が刻んだ最高の護り文字であることは、棍を持つ手から伝わるビリビリとした感触で知ることが出来た。

「この棍は持ち主を選ぶ。  
自分に見合わぬ人間が手にすれば、恐らくその重みに耐えかね取り落とすか、最初から持つことすら出来ないだろう。持てたところで、短い棒のまま、その持つ力を示すことすら、恐らくしない。」

「これを持って、俺の所へ何をしに来た」

棍をカラへ返しながら、レセルは注意深くカラの様子を窺う。受け取るカラの金の瞳は、腰のオスティルより明るく輝いている。

「笑わない？」

ぼそりと、気恥かし気にレセルの表情を窺うカラの様子に、レセルも少し肩の力が抜けた。

「笑うような話なのか？」

カラはだらしなく座るナジャを軽く睨んだ後、おずとレセルへ視線を戻す。

「だってナジャが？阿呆？って言うんだ。あ、ナジャって言うのはこの蜥蜴なんだけど　あのね、オレ、この棍の文字を刻んでくれたティルナの王様が、手で触れただけで、酷い病気や怪我を完全に治すことが出来るすごい力を持った人だって聞いたから、もしかしたらこの棍にも、その王様の力が少し移ってないかなって、思ってた……」

「ティルナ王が、この文字を刻んだ？」

「う、うん。　ラスターと王様は友達だから、頼んでくれてたんだって。」

笑われなかったことにホツとしつつも、レセルの驚きの表情にカラは戸惑ってしまった。

ややして、レセルはゆっくり立ち上がると、小卓の上のランプに灯りを入れた。　ぼうと燃え上がったオレンジの火が、室内を柔らかな光で照らす。

「俺はお前ほど暗闇で物は見えん。　お前が暗いままがいいと言うなら、消すが？」

カラも立ち上がると、顔を横に振った。

レセルが寝台に腰を下ろし、改めてカラの顔に視線を固定した。

先程までの険しさはないが、厳しい印象の黒の瞳に無言で見つめられていると、カラはどうにも落ち着かず、じわじわと緊張してしまふ。

「お前、　治癒　を何処で学んだ？」

「？　オレ、何も習ったことないよ？」

レセルの問いに、カラはただ首を傾げた。

神殿に仕える神官や巫子の中で、一部の素質ある者や才能ある呪術師は、それ相応の修練を積んだ末に、病や傷を、薬や道具なしに治療する 治療 の術を習得するというのが、一般的には、それも傷や病を多少軽くする程度だと聞く。

だが、ごく稀に、生まれ付きそのような力を有する者の中には、瀕死の傷でも癒してしまう強い力を示す能力者がいるという。 現 テイルナ王や、アイルーナがそうであった。

そして恐らく、目の前にいるカラも 。

「棍は？ かざす以外、棒術を身に付けているのか？ 剣を扱ったことも、地下での動きを見た限りでは無いようだったが？」

問い詰めるような、レセルの口調に、カラは少しむっとして返事をしなかった。

「今から一人で、地下へ行くつもりだったのだろうか？」

「どうしてそれっ」

言いかけて、慌てて口を押さえる。

レセルは深くため息を吐くと、眉間にしわを寄せカラを睨んだ。

「イリスミルトにも黙ってのことだな？」

短い、叱責するような口調で言い詰められ、カラは縮こまり黙った。

「お前の蜥蜴が、お前を阿呆と言うのが解る」

「な　っ」

「当てもなくあの地下へ戻ってどうなる？　目的は、お前の連れとその聖獣の搜索だろうが、あの地下がどれほど複雑で深いか、間にどれほどの敵が潜んでいるか、目的の者達が最終的に何処にいるか、お前は見当が付いているのか？」

「あ、あの石牢にガーランもいたってナジャが言ってた。　石牢までの道は覚えてるし、ナジャが臭いで辿れるっていうから、きつと見つけられるよ。　そ、それに今のオレ、力はすごく強いし、ナジャの炎も　ある、し……」

淡々と、しかしきつい口調で指摘するレセルの言葉に、口答えするように応じた。

レセルはカラの足下に座るナジャとその第三眼を見た後、小さくため息を吐くと、組んだ手に口元を当てた。

「そこへ行くまでの道すがらはどうする？　出くわす相手相手と、無駄な戦いを繰り返しながら進むか？　その先は？」

レセルはいったん言葉を切り、落としていた視線をカラへ戻した。一言一言、区切つるように語るレセルの言葉の合間に、反論を挿む余裕は十分にあつた。　しかし、カラは何も言えず、たじろぐように、身を軽く後方へ捻るしかできない。

「あの地下には、雇われた剣士崩れの破落戸（クワット）が相当数いる。　しかも、お前は自身の目で見ただはずだ、あの地下に潜むものを。　腕力が強かったところで、お前自身の体力が目的を果たせるまで持つのか？　馬鹿力とその蜥蜴の吐く炎だけを恃んで乗り込むつもりなら

ば、必ず途中で捕らえられ、死ぬ」

「そうよ、カラ。あなた一人で行っても、ただ危険なだけ」

突然、背後から言葉が入った。

いつの間にか、イリスミルトが戸を開け立っていた。その脇にはカラよりも背の低い老人が、ちよこんと立っている。

「ティダ様。カラ、ですわ」

イリスが腰をかがめ老人に言うと、老人は真っ白な髪と髭を揺らし頷いた。

しばらくじっと動かなかった老人がゆっくりとした動作で部屋へ入ると、室内の空気が暖まり、ぬるい湯にでも浸かっている様な、ふわりとした感覚になった。

『こりやまた、思っていた以上に小さな子じゃな。おまけに、面白い連れを連れておる。ずいぶん丸々とした蜥蜴だわい』

自分より小さな老人に言われ、カラはむっとしたが反論はしなかった。ナジヤも熱い鼻息をカラの脛に一つかけただけで、それ以上の反応はなかった。だが、老人にはカラ達の心の内が分つたと見え、眉毛に隠れてほとんど見えない眼を細め笑った。

『すまなかつたね、カラ。お前さんが小さいことを気にしておるのは知っておったが、じかに、実物を目にしたら素直なもんで、つい口について出てしまつたよ』

「オレのこと、知ってるの？」

老人の言葉に嫌味はないのだが、何故、自分を以前から知ったように言うのか解らない。

「カラ。この方はアラスターといつも行動を共にしておられる地の精霊で、テイダ様。あなたに姿を見せられるのは今日が初めてだけれど、あなたがアラスターと行動を一緒にするようになってからずっと、テイダ様もあなたを見てこられたのよ」

カラの金の瞳がぱつと輝く。

「地の精霊？ それって、カナルさんと同じってこと？ それならラスターもナハさんと同じ精霊使ってこと？ 同じ地なのに、カナルさんとは全然違う姿なんだ。なんで今日までオレに姿を見せてくれなかったの？ いつもはどんな姿でラスターと一緒ににいたの？ じいちゃ ティダさんもカナルさんみたいに強い？ その髭が手みたいに動くとか？」

イリスとテイダの顔を交互に見比べながら、カラは少し興奮し前のめりに訊ねた。 優しく、どこか可愛らしいテイダの風体が、カラに容易に親しみを抱かせていた。

『？じいちゃん？でいいよ。まあま、そう一気に訊ねなさんな。好奇心旺盛で元気のいいのいいことじゃがな。 地下での疲れもすっかり飛んでいったようだよ。 結構、結構』

「テイダ様がいらして、皆の傷も回復が速くなりましたわ。この子は元より強い子ですから、あなたの傍に居りましたら、あつという間でしょう」

イリスは、寝台に腰かけこちらを見ていたレセルへ顔を向けた。

「レセル」ホーン。 安心しました」

「 傷が癒えれば、俺は、戻るだけだと知っておられるはず。助ける必要など、なかったのです」

「 助けたのはカラとナハ。 そうね、アイルーナとアルの思いも入っているかしらね。 戻るのはあなたの自由です。 ただ、わたくしはちゃんと対価を払って貰うつもりよ。 ここを出るのは、一定額を払ってからにしてもらいます。 宜しいわね？」

柔らかく微笑むと、イリスはレセルの傍へ歩み寄り、そっとレセルの腹のあたりに触れた。

「痛みは？」

「その子供が 治療 をしたので、たいしては 」

「 ティダ様」

イリスに呼ばれたティダが、レセルの傍らに歩み寄ると、レセルの顔に一寸、緊張が走った。

『 ふむ、しっかり塞がっておる。 これならば特に、手を加える必要はないの。 カナルの連れの地の腕もなかなか良いようだが、その子の力はイリスミルト、そなたの娘に負けぬようじゃ』

イリスの顔を見上げ言った後、ティダはふわりと身体をカラの顔の高さまで浮かべ、ずいと、髭もじゃの顔をカラへ近付けてきた。

『お前さんは、アラスターとその連れを探し出したいのかな?』

「精霊とは長く眼を合わせるな」というカナルの言葉を思い出したが、どうしようもなかった。

眉毛で隠れ、よくは見えないティダの眼は、おそろくとても優しい。恐怖はない。しかし、それでも、押さえこまれる様な大きな圧力を感じる。

言葉が喉に詰まって出なかったので、首を縦に振ることで答えた。

『どうして探したいのかな? 闇森の主 を探し当てるために必要だからかね?』

「それも、あるけど……」

はつきりしないカラの答えに、ティダは髭を揺らして笑った。

『意地悪な質問だろうが、聴かせておくれな。お前さんにとってアラスターは、どういった存在かね? 彼のことは好きかね? それとも嫌いかね? 《名》と《影》を奪い返す目的さえなければ、あの者と一緒に居たところで、なんら楽しきこともなかるう? アラスターと行動を共にせずとも、《ふたつの宝》を取り戻す術があるとするれば、カラ、お前さんはどうするかね?』

「え、あるの? 《ふたつの宝》を取り戻す方法、なんか知ってるの?」

勢い付いて訊き返すカラに、ティダは落ち着くように手で制した。

『お前さん自身が動かねば事を成せないことは、変わりはないがの。ただ、アラスターと行動を共にする必要はなくなる、というだけ

じゃ  
』

もしかして、手早く取り返す方法があるのかと期待してしまつた分、肩透かしを食らつた気もしたが、腹を立てる気にはならなかつた。

「そんな……どんな存在かなんてオレ、そんなこと、考えたことない、けど……」

自分の中に答えを探すように、カラは視線を落とす。

「オレ、ラスターが好きとか嫌いとか　どっちもよく思うんだ。ラスター、何にも話してくれないし、いつつと同じ顔で、何考えてるか分かんないし、ちよつと、近寄り難いつて思うんだ。けど、オレを助けてくれたし、強いし、字を教えてくれるし。　突き放されているみたいだけど　けど時々、オレを見てくれているんだ、つて思うことがあつて　……」

いったん言葉を切ると、今度はカラの方から、テイダの顔を覗き込むように見た。

「《ふたつの宝》を取り返す方法が他にあつたとしても、それとは別にしても、オレ、ラスターとガーランを探したい。　オレ　オレね、ラスターのこととつと知りたいんだ。　昼間にナハさんと話をして、ナハさんを羨ましいつて思ったんだ。　ラスターのこと、いっぱい知っていそうで、いいなあつて思った。　だから、オレもナハさんみたいに、ラスターが何でも話してもいいつて思えるような相手になりたい、つて思ったんだ。　それでね、そうなつたらたくさん話をして、色々訊いてみたいことがあるんだ。　だから、だからオレ　……」

耳まで真っ赤にして語っていたカラの言葉は、尻すぼみに小さく  
なっていく。

「ヘンかな、こんな理由じゃ……」

おもむろに、ティダはカラの頭を撫で始めた。

『可笑しくなんかないよ。　そうか、話したいか、知りたいか。  
そうか、そうか』

ティダに並ぶように立っていたイリスが、カラの前に膝を付き、  
手を取りそつと包んだ。

「カラ。　あなたの気持ちはわかりました。　けれど、一人で乗り  
こんではいけないわ。　今、ナハがカナルと一緒に探りに行ってい  
ます。　様子がわかるまで、いま少し、あなたが行動をするのは待  
って。　先程レセルが言ったように、キソスの地下は迷宮のように  
複雑で、たくさんの危険が潜んでいるの。　この家にずっと閉じ込  
めておこうというのではないの。　ただあなたを、当てもなく、危  
険に曝すためだけに行かせることは、したくないの。　分かって、  
くれるかしら？」

柔らかく諭されると、それでも行きたいとは口に出せない。　だ  
からと言って、行きたいという気持ちに変化は起こらない。

「でも……」

「カラ。　待つ間、レセルから棍の基本を学びなさい。　レセル。  
この子に教えるくらいには、動けますね？」

肩越しに、イリスはレセルの回答を待った。レセルは少々驚いたようだったが、承諾した。

しかし、肝心のカラが一番戸惑っていた。

『安心おし。アラスターには強力な助っ人が付いておるから、そう簡単にはどうにもならんよ。実際、つい先程まで一緒に居ったわしが言うのだから。今はひとつ、わしの言うことを信じてはくれんかね?』

カラの頭をポンポンと叩きながら、ティダが訊ねた。

「待つといっても、ほんの半日か、長くても一日くらいよ。カラ、それまでにある程度のことを身体に覚え込ませるのは、生半かなことではなくてよ」

立ち上がるイリスに手を引かれ、カラは歩み出す。レセルも寝台から立ち上がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5384o/>

---

新レーゲスタ創世譚 第四章 『行きしもの 過ぎし刻』

2011年9月19日23時23分発行